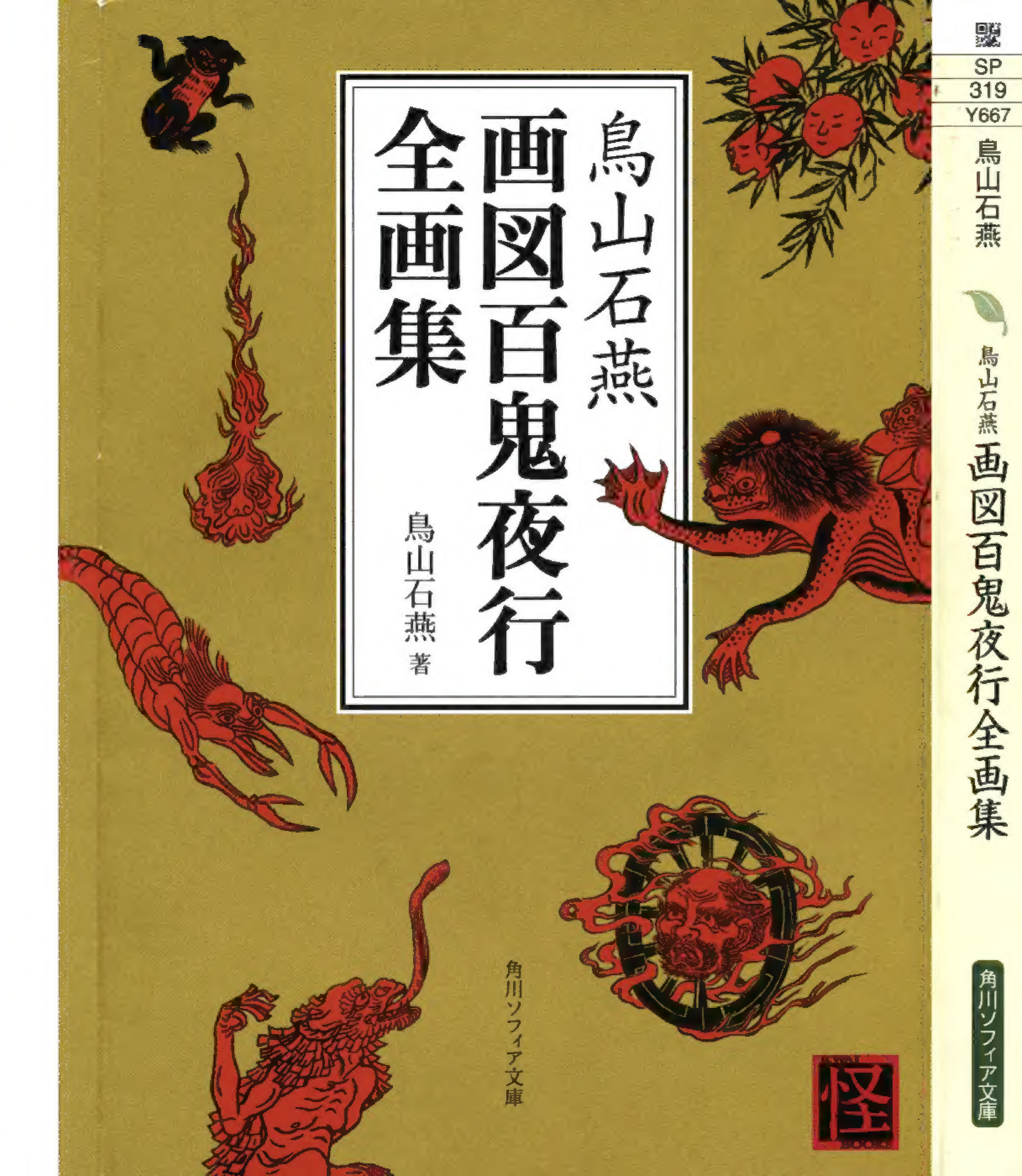
鳥山石燕／とりやま せきえん

正徳二年(1712年)～天明八年(1788年)、江戸の人。本名は佐野豊房。狩野派の絵師で、妖怪画を好んで描いた。その豊かな想像力で描かれた妖怪たちは、現代にいたるまで妖怪画家たちに大きな影響を与えてきた。

装画／鳥山石燕
(川崎市市民ミュージアム、東北大学附属図書館所蔵)



SP
319
Y667

鳥山石燕

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

角川ソフィア文庫




9784044051013
1920195006672
ISBN4-04-405101-1
C0195 ¥667E
定価：本体667円(税別)

かまいたち、火車、姑獲鳥、ぬらりひょん、狂骨……現代の小説や漫画でおなじみの妖怪たち。その姿形をひたすら描いた江戸の絵師がいた。あふれる想像力と類いまれなる画力で、さまざまな妖怪の姿を伝えた鳥山石燕の妖怪画集全点を、コンパクトな文庫一冊に収録！
(解説・多田克己)

カバー 泉文社

画図百鬼夜行



陰摩羅鬼

蔵経の中に、初て新なる屍の気変じて陰摩羅鬼となる、と云へり。そのかたち鶴の如くして、色くろく目の光ともしびのごとく羽をふるひて鳴声たかし、と清尊録にあり。



皿かぞえ

ある家の下女十の皿を一つ井におとしたる科によりて害せられ、その亡魂よなよな井のはたにあらはれ、皿を一より九までかぞへ十をいはずして泣叫ぶといふ。此古井は播州にありとぞ。



人魂（ひとだま）

骨肉（こつにく）は土（つち）に帰し、魂気（こんき）の如きはゆかざることなし。みる人速（すみやか）に下がへのつまをむすびて招魂（せうごん）の法を行（おこな）ふべし。



舟幽霊

西国または北国にても、海上の風はげしく浪たかきときは、波の上に人のかたちのものおほくあらはれ、底なき柄杓にて水を汲事あり。これを舟幽霊といふ。これはとわたる舟の梶をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。



川赤子（かわあかご）

山川のもくずのうちに、赤子のかたちしたるものあり。これを川赤子といふなるよし。川太郎、川童（わらは）の類ならんか。



古山茶の霊

ふる山茶の精怪しき形と化して、人をたぶらかす事ありとぞ。すべて古木は妖をなす事多し。



加牟波理入道

大晦日の夜、厠にゆきて、がんばり入道郭公、と唱ふれば、妖怪を見ざるよし、世俗のしる所也。もろこしにては厠神の名を郭登といへり。これ遊天飛騎大殺将軍とて、人に禍福をあたふと云。郭登郭公同日の談なるべし。



雨降小僧（あめふりこぞう）

雨のかみを雨師（うし）といふ。雨（あめ）ふり小僧といへるものは、めしつかはるゝ侍童（じどう）にや。



日和坊

常州の深山にあるよし。雨天の節は影見えず。日和なれば形あらはるゝと云。今婦人女子てるてる法師といふものを紙にてつくりて晴をいのるは、この霊を祭れるにや。

青女房（あおにょうぼう）

荒（あれ）たる古御所（ふるごしよ）には青女房とて女官（にようくはん）のかたちせし妖怪（ようくはい）、ぼうぼうまゆに鉄漿（かね）くろぐろとつけて、立まふ人をうかゞふとかや。

序文

凡物の化するや、石の燕となり筆の蟋蟀となるは、よく化すといふべし。こゝに鳥山石燕なるもの、画にあそぶこと年あり。その筆亦よく化して、森羅万象なさずといふものなし。さきに鳥山彦を著し、世人しる処なり。今はた古画の百鬼夜行に拠て意を加へ容を補ふ。書肆あり、はやく見とゞめて梓に寿せんことをこふ。授るに至て六巻となし、陰陽風雨晦明をもてわかつ。其まゝに画図百鬼夜行と題し、已に前編三冊成ぬ。こゝに於ゐて序を予にもとむ。燕は俳歌の友にして相識ことひさしければ、辞におよばず。たゞ怪力乱神をかたらざるのいましめをまもる人には、いさゝか瞻を避るのおもひなきにしもあらざるのみ。
安永龍蔵乙未冬東都隠士紫陽主人老蚕



毛倡妓（けじょうろう）

ある風流士（たはれお）うかれ女（め）のもとにかよひけるが、高楼（たかどの）のれんじの前にて女の髪（かみ）うちみだしたるうしろ影をみてその人かと前をみれば、額（ひたい）も面（おもて）も一チめんに髪（かみ）おひて、目はなもさらにみえざりけり。おどろきてたえいりけるとなん。



骨女

これは御伽ぼうこに見えたる年ふる女の骸骨、牡丹の燈籠を携へ、人間の交をなせし形にして、もとは剪燈新話のうちに牡丹燈記とてあり。



○鵺（ぬえ）
○以津真天（いつまで）
○邪魅（じゃみ）
○魍魎（もうりょう）
○貉（むじな）
○野衾（のぶすま）
○野槌（のづち）
○土蜘蛛（つちぐも）

○比々（ひひ）
○百々目鬼（どどめき）
○震々（ぶるぶる）
○骸骨（がいこつ）
○天井下（てんじょうくだり）
○大禿（おおかぶろ）
○大首（おおくび）
○百々爺（ももんじい）

○金霊（かねだま）
○天逆毎（あまのざこ）
○日の出（ひので）



鵼（ぬえ）

鵼は深山にすめる化鳥なり。源三位頼政、頭は猿、足手は虎、尾はくちなはのごとき異物を射おとせしに、なく声の鵼に似たればとて、ぬえと名づけしならん。



以津真天

広有、いつまでいつまでと鳴し怪鳥を射し事、太平記に委し。



邪魅（じゃみ）

邪魅（じゃみ）は魑魅（ちみ）の類（たぐひ）なり。妖邪（ようじゃ）の悪気（あくき）なるべし。



魍魎（もうりょう）

形 三歳の小児の如し。色は赤黒し。目赤く、耳長く、髪うるはし。このんで亡者の肝を食ふと云。



貉（むじな）

貉（むじな）の化（ばく）る事をさをさ狐狸（きつねたぬき）におとらず。ある辻堂（つぢだう）に、年（とし）ふるむじな僧（そう）とばけて六時（じ）の勤（つとめ）おこたらざりしが、食後（しよくご）の一睡（すい）にわれを忘（わす）れて尾（お）を出（いだ）せり。



野衾（のぶすま）

野衾は鼯の事なり。形蝙蝠に似て、毛生ひて翅も即肉なり。四の足あれども短く爪長くして、木の実をも喰ひ、又は火焔をもくへり。



野槌

野槌は草木の霊をいふ。又沙石集に見えたる野づちといへるものは、目も鼻もなき物也といへり。



- 木魅（こだま）
- 天狗（てんぐ）
- 幽谷響（やまびこ）
- 山童（やまわらわ）
- 山姥（やまうば）
- 犬神（いぬがみ）
- 白児（しらちご）
- 猫また（ねこ）

- 河童（かつぱ）
- 獺（かわうそ）
- 垢嘗（あかなめ）
- 狸（たぬき）
- 窮奇（かまいたち）
- 網剪（あみきり）
- 狐火（きつねび）



土蜘蛛（つちぐも）

源頼光土蜘蛛（くも）を退治（たいぢ）し給ひし事、児女（じぢょ）のしる所也。



比々(ひひ)

ひゝは山中(さんちう)にすむ獣(けもの)にして、猛獣(もうじう)をとりくらふ事、鷹(たか)の小鳥をとるがごとしといへり。



百々目鬼

函関外史云、ある女生れて手長くして、つねに人の銭をぬすむ。忽腕に百鳥の目を生ず。是鳥目の精也。名づけて百々目鬼と云。外史は函関以外の事をしるせる奇書也。一説にどゞめきは東都の地名ともいふ。



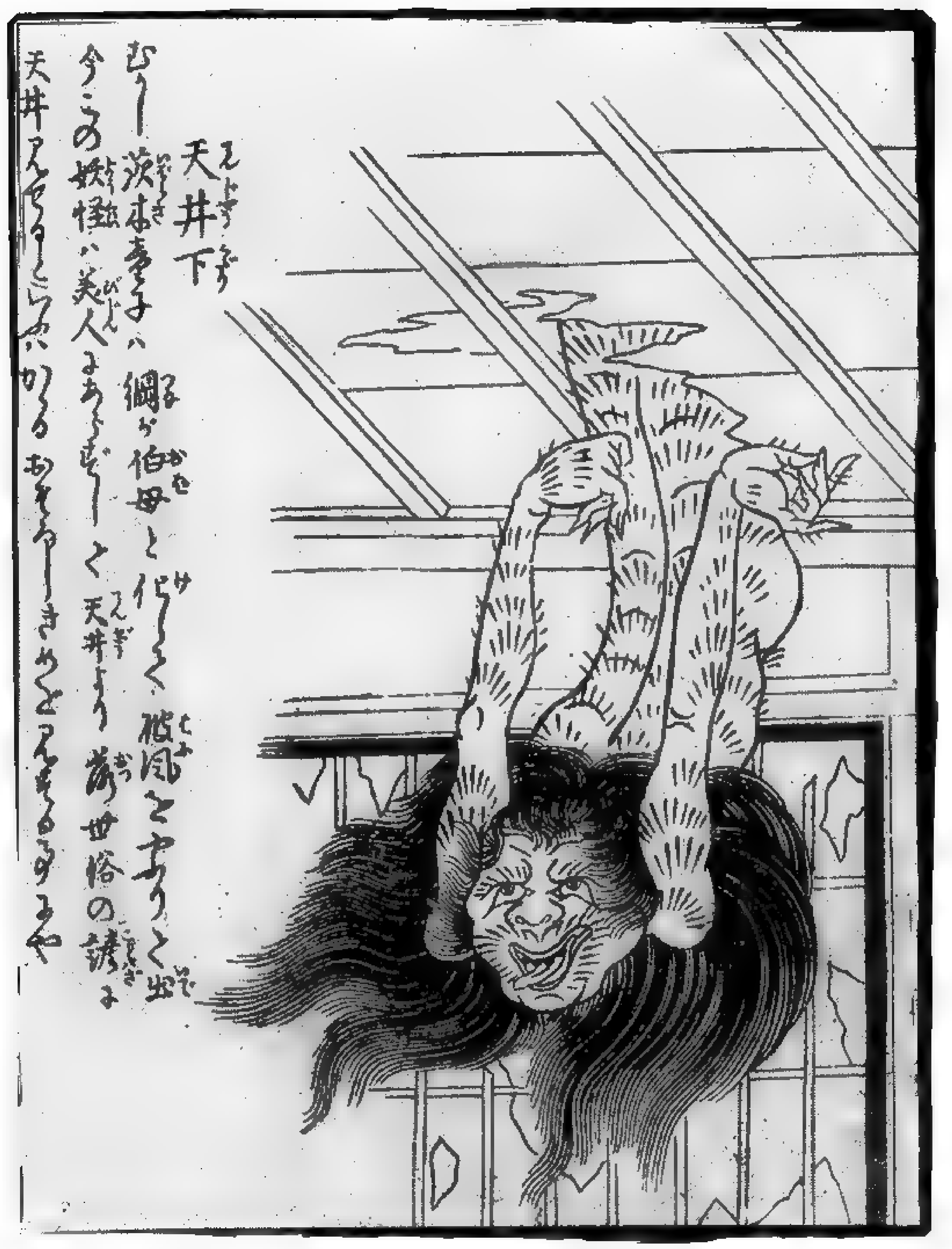
震々（ぶるぶる）

ぶるぶる又ぞゞ神とも臆病神（おくべうがみ）ともいふ。人おそるゝ事あれば、身戦栗（みせんりつ）してぞつとする事あり。これ此神のゑりもとにつきし也。



骸骨（がいこつ）

慶運法師骸骨（けいうんほうしがいこつ）の絵賛（えさん）に、かへし見よおのが心はなに物ぞ色を見声をきくにつけても



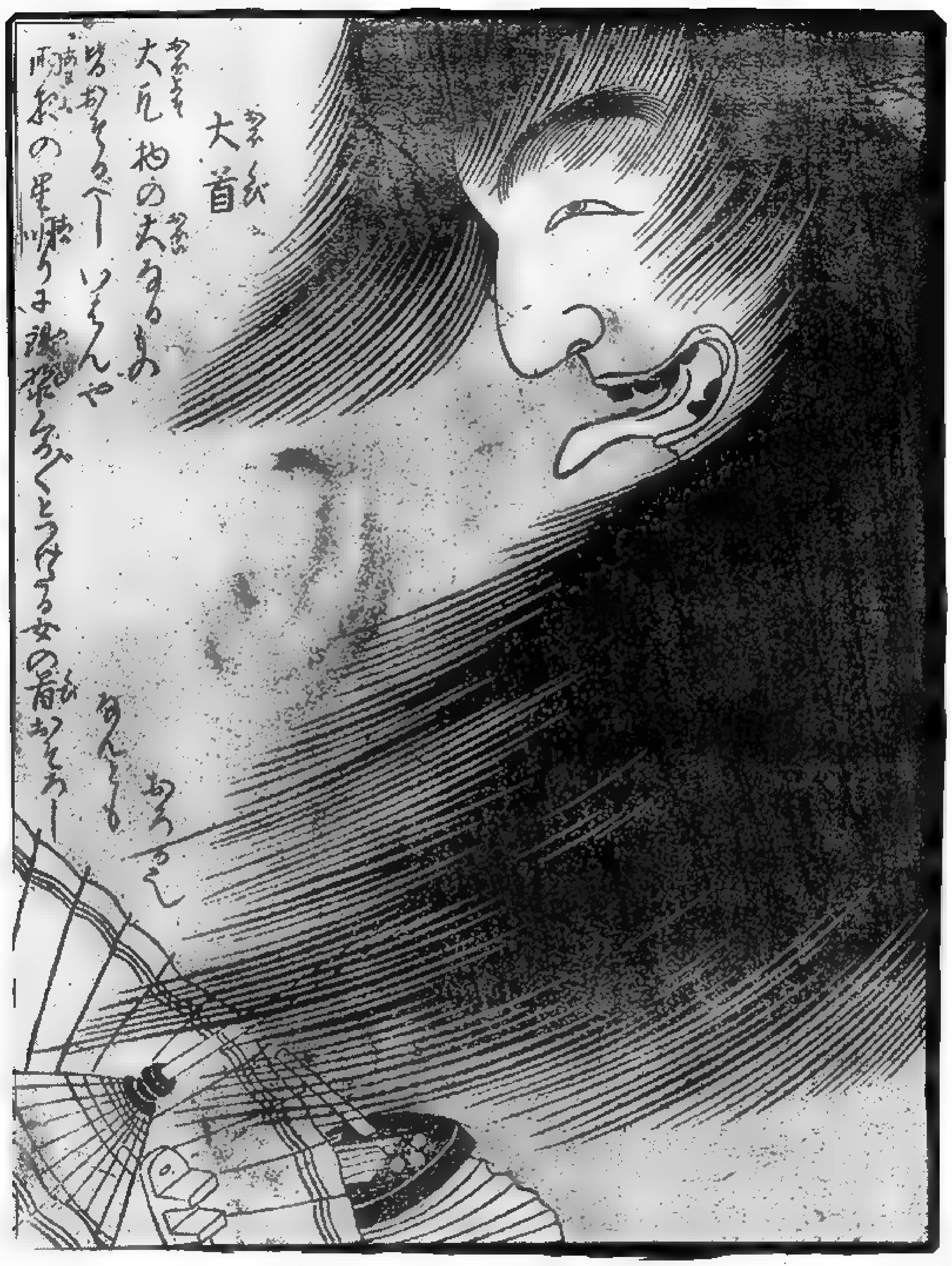
天井下（てんじょうくだり）

むかし茨木童子は綱が伯母と化して破風をやぶりて出、今この妖怪は美人にあらずして天井より落。世俗の諺に天井見せるといふは、かゝるおそろしきめを見する事にや。



大禿（おおかぶろ）

伝へ聞、彭祖は七百余歳にして猶慈童と称す。是大禿にあらずや。日本にても那智高野には頭禿に歯豁なる大禿ありと云。しからば男禿ならんか。



大首（おおくび）

大凡（おほよそ）物の大（おほい）なるもの皆おそるべし。いはんや雨夜（あまよ）の星明（あか）りに鉄漿（かね）くろぐろとつけたる女の首（くび）おそろし。なんともおろか也。



百々爺

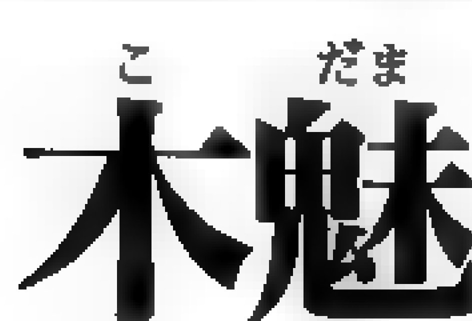
百々爺未レ詳。愚按ずるに、山東に摸捫窠と称するもの、一名野襖ともいふとぞ。京師の人小児を怖しめて啼を止むるに元興寺といふ。もゝんぐはとがごしとふたつのものを合せて、もゝんぢいといふ歟。原野夜ふけてゆきゝたえ、きりとぢ風すごきとき、老夫と化して出て遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。



金霊（かねだま）

金だまは金気也。唐詩に不レ貪 夜識ニ金銀気一といへり。又論語にも富貴在レ天と見えたり。人善事をなせば天より福をあたふる事、必然の理也。

○木魅（こだま）
百年の樹にハ
神ありてかたちを
あらハすといふ



木魅（こだま）

百年の樹には神ありてかたちをあらはすといふ。



天逆毎（あまのざこ）

或書ニ云フ。素盞烏尊ハ猛気胸ニ満チ、吐テ一ノ神ヲ為ス。人身獣首、鼻高ク耳長シ。大力ノ神ト雖モ、鼻ニ懸テ千里ヲ走ル。強堅ノ刀ト雖モ、嚙ミ砕テ段々ト作ス。天（アマ）ノ逆毎（ザコ）姫ト名ヅク。天ノ逆気ヲ服シ、独身ニシテ児ヲ生ム。天ノ魔雄（サク）神ト名ヅクト云云。摸捫窩主人賛



日の出

夫妖は徳に勝ずといへり。百鬼の闇夜に横行するは、佞人の闇主に媚びて時めくが如し。大陽のぼりて万物を照せば、君子の時を得、明君の代にあへるがごとし。



今昔百鬼拾遺

百鬼拾遺序

画師石燕は隠老なり。性質温雅にして、庭に一簣の功を成し、池に九仭の泉を引て、春紅覞睆を聞き、夏涼沂楽を張る。秋水荻花を流し、冬雪関々を群す。四時此の楽事に耽て、老の将に至らんとするを知らざるなり。惟同好の者至れば、欣然として茶を烹じ、勉然として画を談ず。既に筆を下すと、直ちに百余図を成すに足る。奕々玄勝、以て賞すべし。此に由て弟子益々衆し。成編も且つ多し。皆な世の知る所なり。丙申の春百鬼夜行を著す。己亥の歳、後編継ぎ出して、前後百鬼全し。今茲に辛丑の春、書肆某又来て幽冥の図を請ふ。而して以て之を刻んと欲す。隠老笑って曰く、多く之を図す。則ち啻に心力を損ずるのみならずして、譏りを千載に取る。但だ恐は鬼哭さん。夫れ之を何如、と。書肆曰く、画工は元と是れ無類の心を尽す。有道の器に合す。若し夫れ粟を雨し鬼哭するも、亦骨力の至る所にして、尚を佳事なり。強て請ふ、辞すること莫れ、と。是に於て已むこと無して、怪を探り妖を聚めて三巻と為す。百鬼拾遺と題す。序を余に問ふ。余不才を以て辞す。隠老の曰く、負俗の図嬰児の戯と為すのみ、と。不才にして且つ序を作す。則ち是れ一怪事なり。因て固陋を妄（忘）れて其の端に書す。

安永十辛丑春　元洲　滕武幹

和歌はあめつちをうごかし、是は目に見へぬ鬼がみを絵空ごとに筆もて行まゝ、あやしうもの狂はしきさま、としごとにゑがくは、おぼろげならぬ世々の史林にもはづかはしく、ひめこめ侍るを、書肆某いへる、嬰児のむつかるを止んはしかよりはなし。しきりに乞にまかせぬれば、松たつ春の勇ましきにあたひをまちて、估めやくとやら、桜木にのする事とはなりぬ

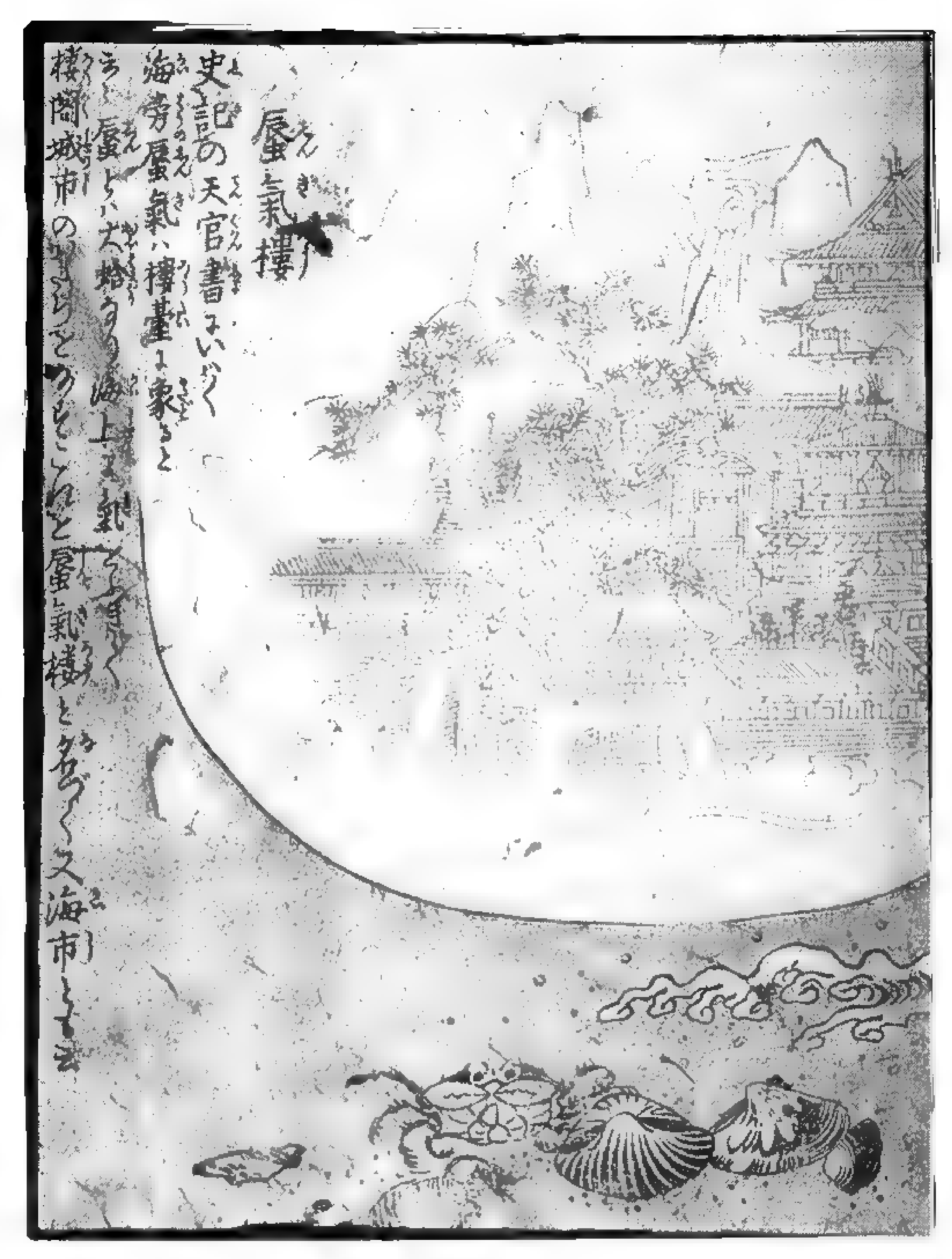
安永九のとし蠟月　石燕自序



○蜃気楼（しんきろう）
○燭陰（しょくいん）
○人面樹（にんめんじゅ）
○人魚（にんぎょ）
○返魂香（はんごんこう）
○彭侯（ほうこう）
○天狗礫（てんぐつぶて）
○道成寺鐘（どうじょうじのかね）
○燈台鬼（とうだいき）

○泥田坊（どろたぼう）
○古庫裏婆（こくりばば）
○白粉婆（おしろいばば）
○蛇骨婆（じゃこつばば）
○影女（かげおんな）
○倩兮女（けらけらおんな）
○煙々羅（えんえんら）





蜃気楼

史記の天官書にいはく、海旁蜃気は楼台に象ると云々。蜃とは大蛤なり。海上に気をふきて、楼閣城市のかたちをなす。これを蜃気楼と名づく。又海市とも云。



燭陰（しよくいん）

山海経に曰、鍾山の神を燭陰といふ。身のたけ千里、そのかたち人面龍身にして赤色なりと。鍾山は北海の地なり。



陰……一一



人面樹（にんめんじゅ）

山谷（さんこく）にあり。その花（はな）人の首（くび）のごとし。ものいはずしてたゞ笑（わら）ふ事しきりなり。しきりにわらへば、そのまゝ落花（らくくは）すといふ。

人魚
建木の西にあり人面にて魚身足なし胸より上ハ人にて下ハ魚に似たり是氐人國の人なりとも云



建木の西にあり。人面にして魚身、足なし。胸より上は人にして下は魚に似たり。是氐人国の人なりとも云。



返魂香

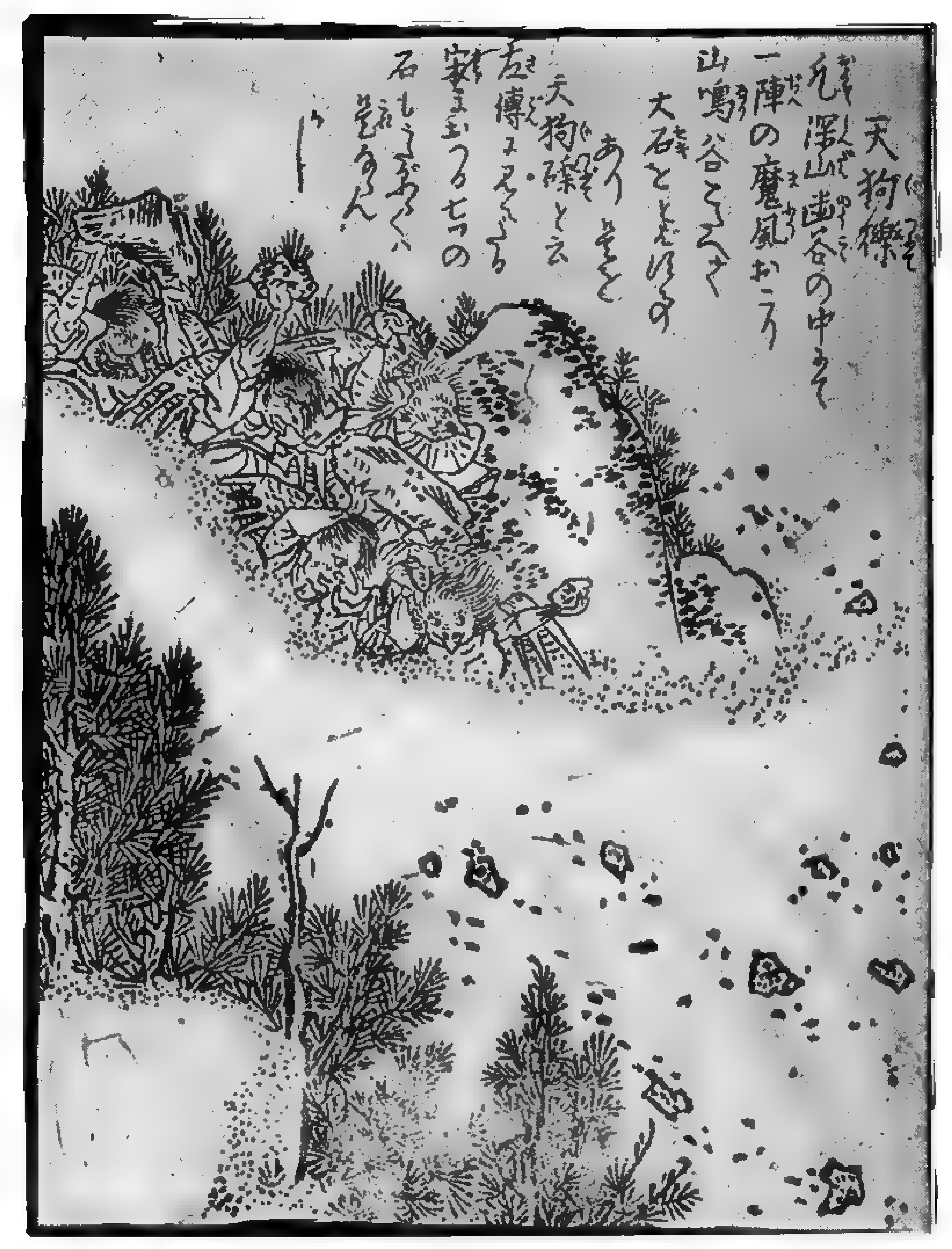
漢武帝李夫人を寵愛し給ひしに、夫人みまかり給ひしかば、思念してやまず、方士に命じて返魂香をたかしむ。夫人のすがた髣髴として烟の中にあらはる。武帝ますますかなしみ詩をつくり給ふ。

是耶非耶立而望之 偏 [redacted] 々 何 冉 々 其 来 遅



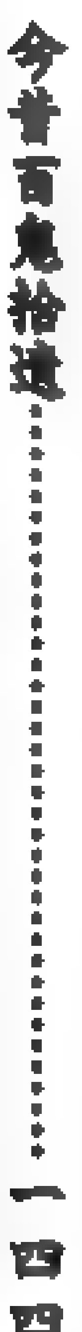
彭侯

千歳の木には精あり。状黒狗のごとし。尾なし。面人に似たり。又山彦とは別なり。



天狗礫

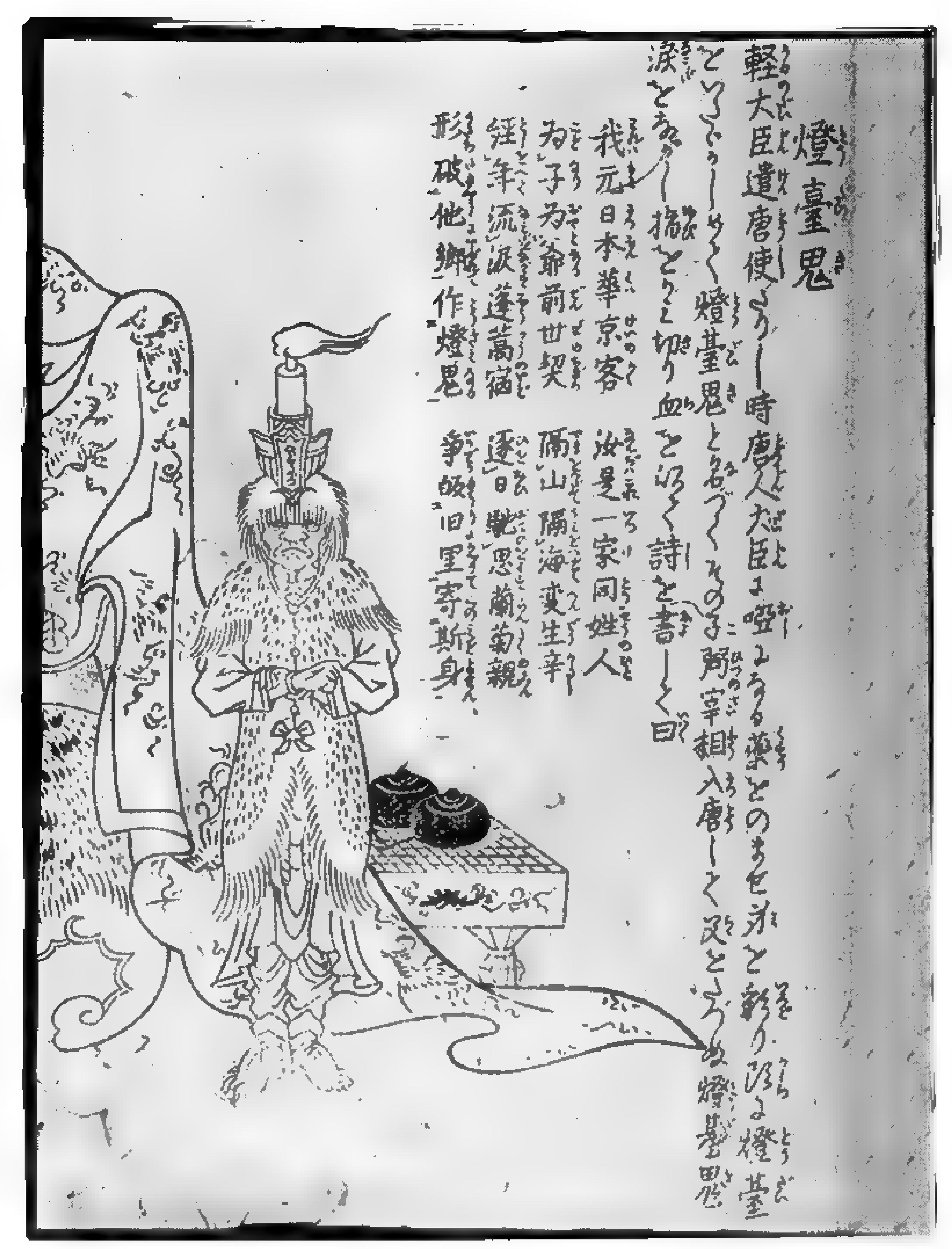
凡深山幽谷の中にて一陣の魔風おこり、山鳴、谷こたへて、大石をとばす事あり。是を天狗礫と云。左伝に見えたる宋におつる七つの石もうたがふらくは是ならんかし。



道成寺鐘

真那古の庄司が娘、道成寺にいたり、安珍がつり鐘の中にかくれ居たるをしりて蛇となり、その鐘をまとふ。この鐘とけて湯となるといふ。

或曰道成寺のかねは今京都妙満寺にあり。その銘左のごとし／紀州日高郡矢田庄文武天皇勅願所道成寺治鐘勧進比丘別当法眼定秀檀那源万寿丸并吉田源頼秀合山諸檀越男女大工山願道願小工大夫守長延暦十四年乙亥三月十一日



燈台鬼

軽大臣遣唐使たりし時、唐人大臣に唖になる薬をのませ身を彩り頭に燈台をいたゞかしめて燈台鬼と名づく。その子弼宰相入唐して父をたづぬ。燈台鬼涙をながし指をかみ切り血を以て詩を書して曰、我元日本華京客　汝是一家同姓人　為レ子為レ爺前世契　隔レ山隔レ海変生辛　経レ年流レ涙蓬蒿宿　逐レ日馳レ思蘭菊親　形破二他郷一作二燈鬼一　争皈二旧里一寄二斯身一



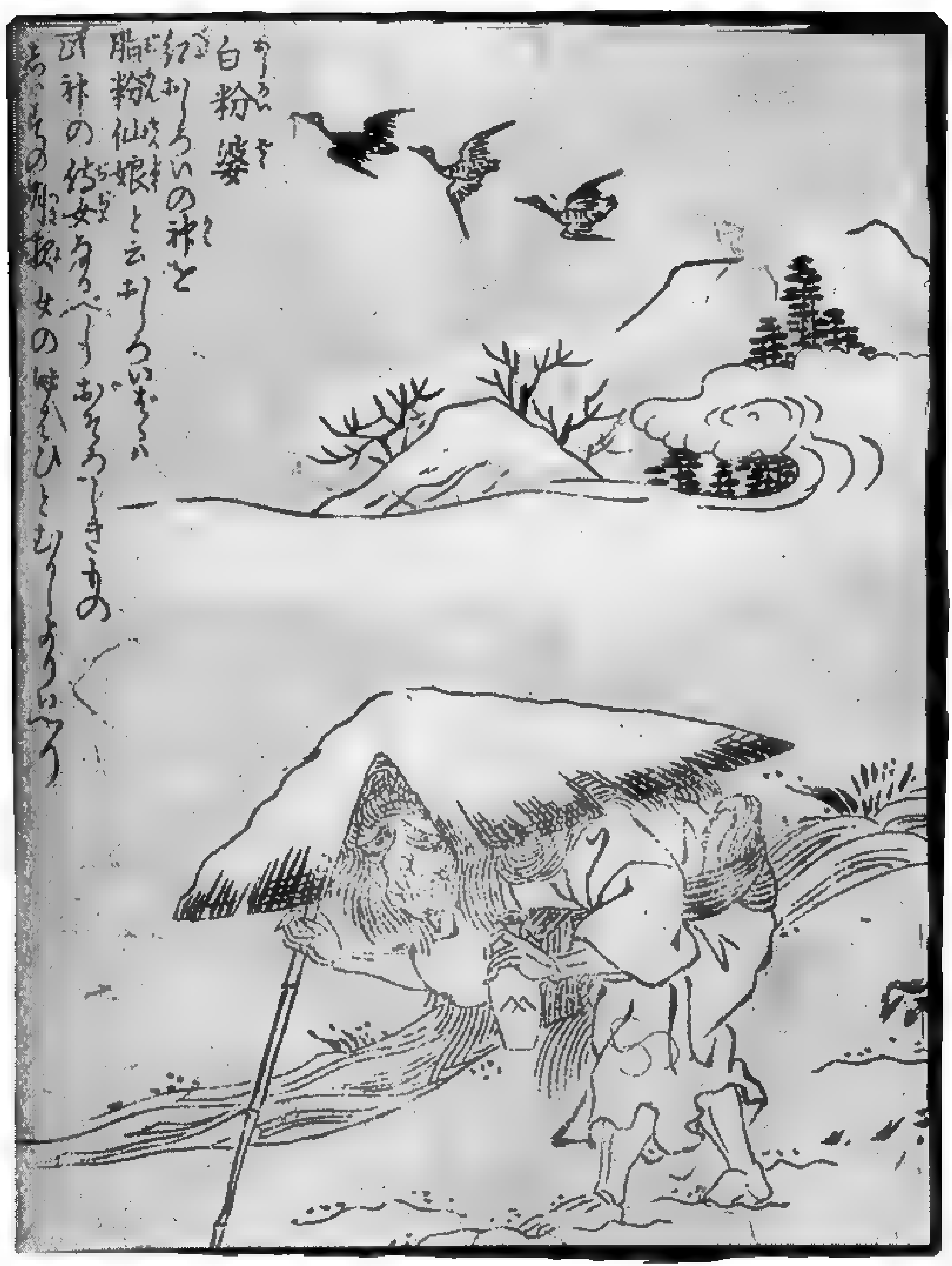
泥田坊

むかし北国に翁あり。子孫のためにいさゝかの田地をかひ置て、寒暑風雨をさけず時々の耕作おこたらざりしに、この翁死してよりその子酒にふけりて農業を事とせず。はてにはこの田地を他人にうりあたへければ、夜な夜な目の一つあるくろきものいでゝ、田かへせかへせとのゝしりけり。これを泥田坊といふとぞ。



古庫裏婆

僧の妻を梵嫂といへるよし、輟耕録に見えたり。ある山寺に七代以前の住持の愛せし梵嫂その寺の庫裏にすみゐて、檀越の米銭をかすめ、新死の屍の皮をはぎて餌食とせしとぞ。三途河の奪衣婆よりもおそろしおそろし。



白粉婆

紅おしろいの神を脂粉仙娘と云。おしろいばゝは此神の侍女なるべし。おそろしきもの、しはすの月夜女のけはひとむかしよりいへり。



天狗(てんぐ)



蛇骨婆

もろこし巫咸国は女丑の北にあり。右の手に青蛇をとり、左の手に赤蛇をとる人すめるとぞ。蛇骨婆は此の国の人か。或説に云、蛇塚の蛇五右衛門といへるものゝ妻なり。よりて蛇五婆とよびしを、訛りて蛇骨婆といふと。未詳。



影女（かげおんな）

ものゝけある家（いへ）には月かげに女のかげ障子（せうじ）などにうつると云。荘子（さうじ）にも罔両（もうりやう）と景と問答（もんだう）せし事あり。景は人のかげ也。罔両（もうりやう）は景（かげ）のそばにある微陰（うすきかげ）なり。



倩兮女

楚の国宋玉が東隣に美女あり。墻にのぼりて宋玉をうかゞふ。嫣然として一たび笑へば、陽城の人を惑せしとぞ。およそ美色の人情をとらかす事、古今にためし多し。けらけら女も朱唇をひるがへして、多くの人をまどはせし淫婦の霊ならんか。



煙々羅

しづが家のいぶせき蚊遣の煙むすぼゝれて、あやしきかたちをなせり。まことに羅の風にやぶれやすきがごとくなるすがたなれば、烟々羅とは名づけたらん。



◎紅葉狩（もみじがり）
◎朧車（おぼろぐるま）
◎火前坊（かぜんぼう）
◎蓑火（みのび）
◎青行燈（あおあんどう）
◎雨女（あめおんな）
◎小雨坊（こさめぼう）
◎岸涯小僧（がんぎこぞう）

◎あやかし
◎鬼童（きどう）
◎鬼一口（おにひとくち）
◎蛇帯（じゃたい）
◎小袖の手（こそでのて）
◎機尋（はたひろ）
◎大座頭（おおざとう）
◎火間蟲入道（ひまむしにゅうどう）

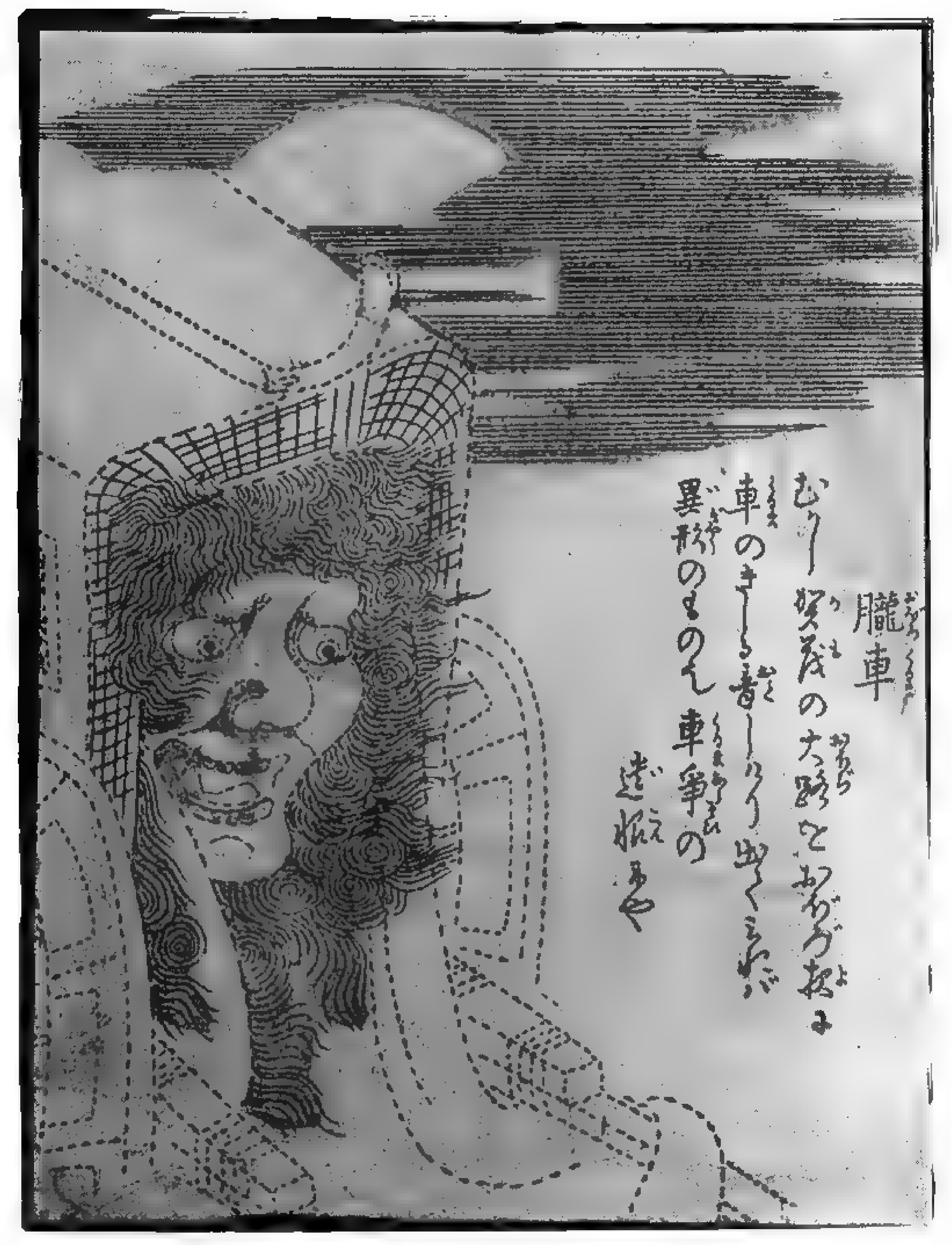
◎殺生石（せっしょうせき）
◎風狸（ふうり）
◎茂林寺釜（もりんじのかま）





紅葉狩

余五将軍惟茂、紅葉がりの時山中にて鬼女にあひし事、謡曲にも見へて皆人のしる所なれば、こゝに贅せず。



朧車（おぼろぐるま）

むかし賀茂（かも）の大路（おほぢ）をおぼろ夜（よ）に車（くるま）のきしる音（おと）しけり。出てみれば異形（いぎやう）のもの也。車争（くるまあらそひ）の遺恨（いこん）にや。



火前坊

鳥部山の烟たちのぼりて、龍門原上に骨をうづまんとする三昧の地よりあやしき形の出たれば、くはぜん坊とは名付たるならん。



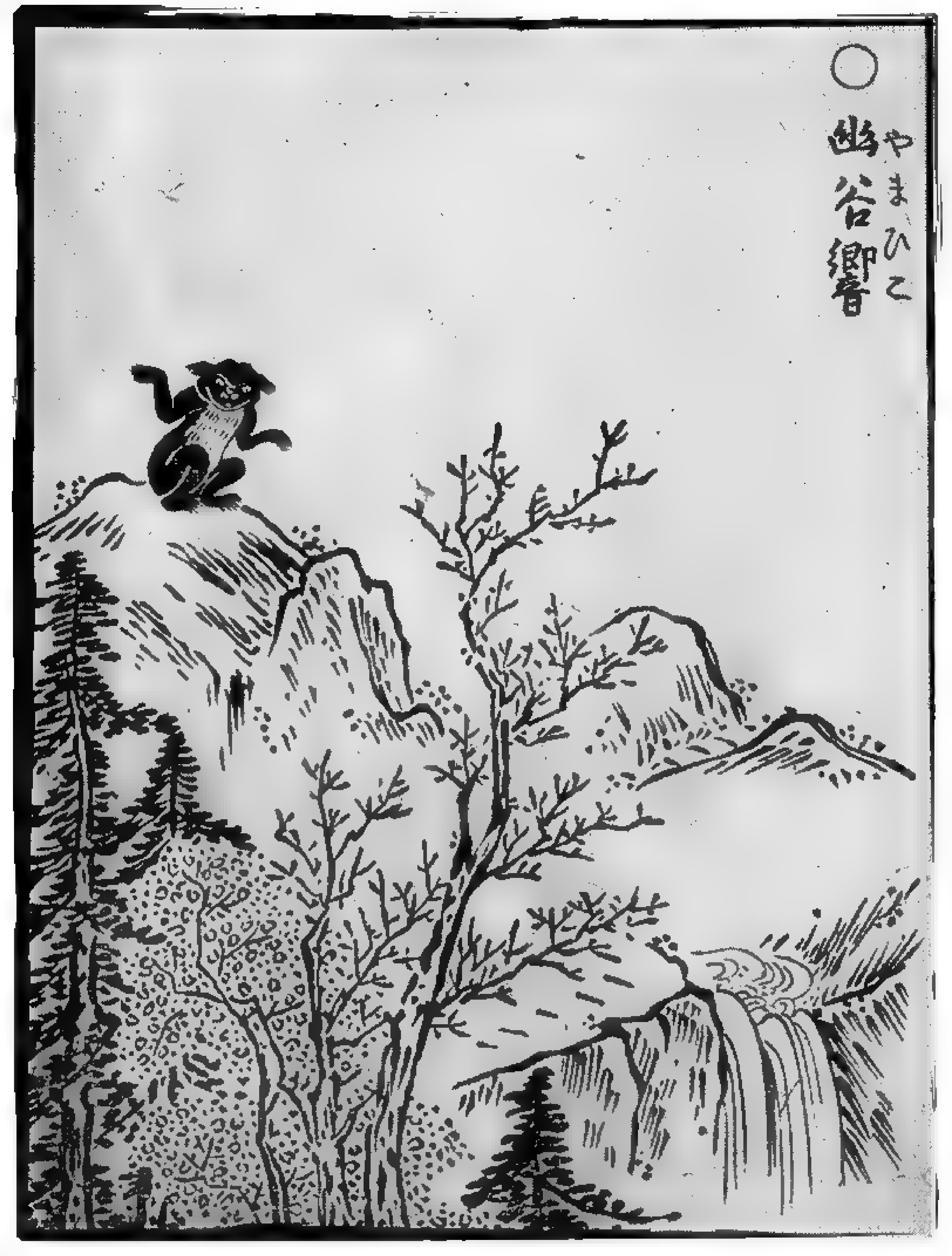
簑火

田舎道などによなよな火のみゆるは多くは狐火なり。この雨にきるたみのゝ嶋とよみし簑より火の出しは陰中の陽気か。又は耕作に苦める百 姓の臑の火なるべし。



青行燈

燈きえんとして又あきらかに、影憧々としてくらき時、青行燈といへるものあらはるゝ事ありと云。むかしより百物語をなすものは、青き紙にて行燈をはる也。昏夜に鬼を談ずる事なかれ。鬼を談ずれば怪いたるといへり。



幽谷響（やまびこ）



雨女（あめおんな）

もろこし巫山（ふざん）の神女（しんぢよ）は、朝（あした）には雲（くも）となり、夕（ゆうべ）には雨（あめ）となるとかや。雨女（あめ）もかゝる類（たぐゐ）のものなりや。



小雨坊

小雨坊は雨そぼふる夜、大みねかつらぎの山中に徘徊して斎料をこふとなん。



岸涯小僧

岸涯小僧は川辺に居て魚をとりくらふ。その歯の利き事やすりの如し。



あやかし

西国の海上に船のかゝり居る時、ながきもの船をこえて二三日もやまざる事あり。油の出る事おびたゞし。船人力をきはめて此油をくみほせば害なし。しからざれば船沈む。是あやかしのつきたる也。



鬼童

鬼童丸は雪の中に牛の皮を蒙りて、頼光を市原野にうかゞふと云。



鬼一口

在原業平二条の后をぬすみいでゝ、あばら屋にやどれるに、鬼一口にくひけるよし、いせ物がたりに見えたり。

しら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを



蛇帯

博物志に云、人帯を藉て眠れば蛇を夢むと云々。されば妬る女の三重の帯は、七重にまはる毒蛇ともなりぬべし。

おもへどもへだつる人やかきならん身はくちなはのいふかひもなし



小袖の手

唐詩に、昨日施レ僧裙帯上断腸猶繫ニ琵琶絃一とは妓女の亡ぬるをいためる詩にして、僧に供養せしうかれめの帯になを琵琶の糸のかゝりてありしを見て、腸をたちてかなしめる心也。すべて女ははかなき衣服調度に心をとゞめて、なき跡の小袖より手の出しをまのあたり見し人ありと云。



機尋（はたひろ）

はたひろはある女夫（おつと）の出てかへらざるをうらみ、おりかゝれる機（はた）をたちしに、その一念（ねん）はたひろあまりの蛇（じゃ）となりて夫の行衛（ゆくゑ）をしたひしとぞ。自二君之出一矣（きみがいでしより）不三復理二残機一（またざんきをおさめず）と唐詩（とうし）にもつくれり。



大座頭（おおざとう）

大座頭（おほざとう）はやれたる袴（はかま）を穿（はき）、足（あし）に木履（ぼくり）をつけ、手に杖（つえ）をつきて、風雨（ようう）の夜（よ）ごとに大道（だいだう）を徘徊（はいくはい）す。ある人これに問（とふ）て曰（いはく）、いづくんかゆく。答（こたへ）ていはく、いつも倡家（しやうか）に三絃（げん）を弄（ろう）すと。



山童（やまわらわ）



火間蟲入道

人生勤にあり。つとむる時は匱からずといへり。生て時に益なく、うかりうかりと間をぬすみて一生をおくるものは、死してもその霊ひまむし夜入道となりて、燈の油をねぶり、人の夜作をさまたぐるとなん。今訛りてヘマムシとよぶは、へとひと五音相通也。



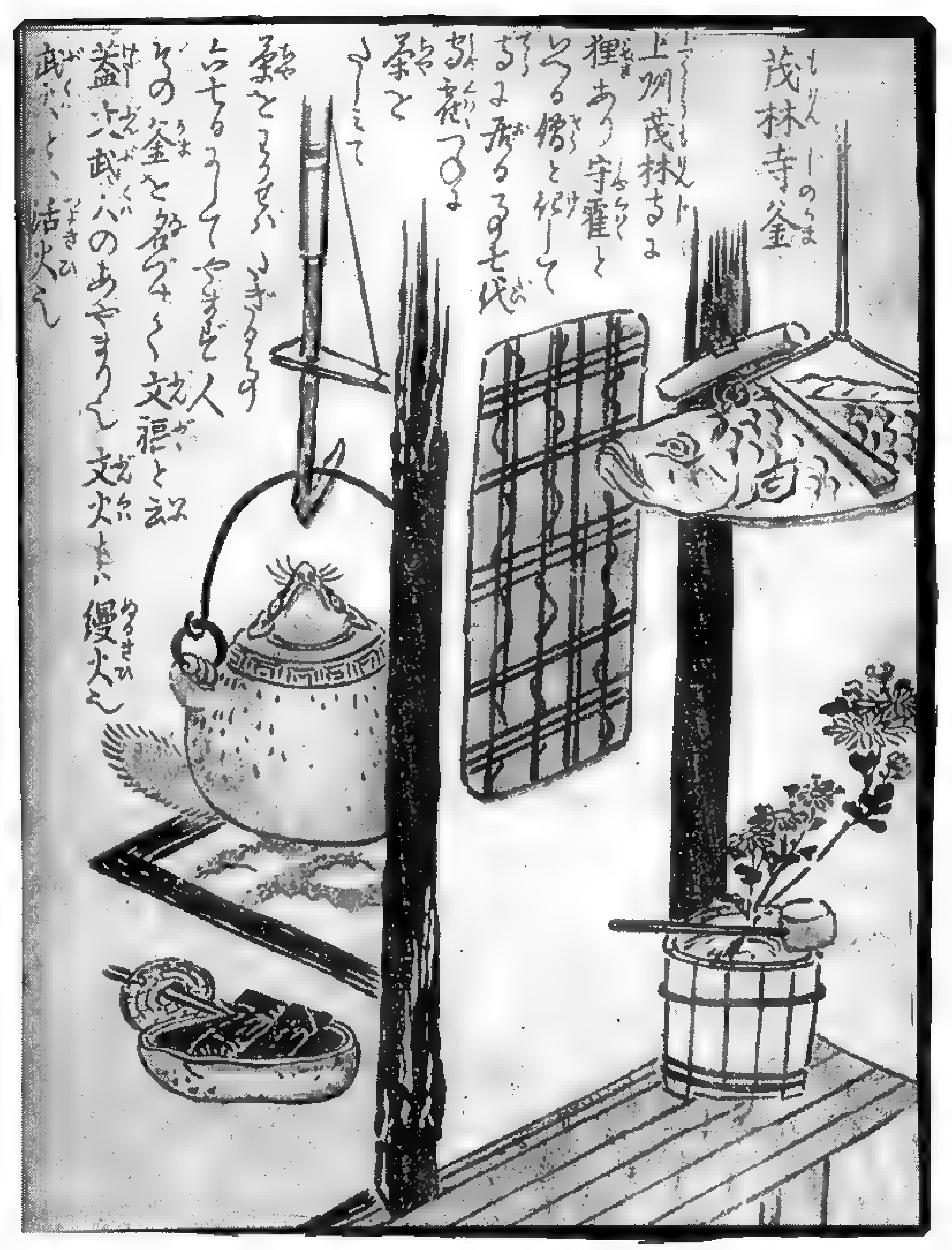
殺生石

殺生石は下野国那須野にあり。老狐の化する所にして、鳥獣これに触れば皆死す。応永二年乙亥正月十一日、源翁和尚これを打破すといふ。



風狸（ふうり）

風によりて巌（いはほ）をかけり木にのぼり、そのはやき事飛鳥（ひてう）の如（ごと）し。



茂林寺釜

上州茂林寺に狸あり。守鶴といへる僧と化して寺に居る事七代、守鶴つねに茶をたしみて茶をわかせば、たぎる事六、七日にしてやまず。人のその釜を名づけて文福と云。蓋文武火のあやまり也。文火とは緩火也。武火とは活火也。

今昔百鬼拾遺



- 羅城門鬼（らじょうもんのおに）
- 夜啼石（よなきのいし）
- 芭蕉精（ばしょうのせい）
- 硯の魂（すずりのたましい）
- 屏風闚（びょうぶのぞき）
- 毛羽毛現（けうけげん）
- 目目連（もくもくれん）
- 狂骨（きょうこつ）
- 目競（めくらべ）

- 後神（うしろがみ）
- 否哉（いやや）
- 方相氏（ほうそうし）
- 滝霊王（たきれいおう）
- 白沢（はくたく）
- 隠里（かくれざと）



羅城門鬼

都良香らせうもんを過て一句を吟じて曰、気霽風梳新柳髪と。その時鬼神一句をつぎていはく、氷消波洗旧苔鬚と。後、渡辺綱がために腕をきられ、からきめ見たるもこの鬼神にや。



夜啼石

遠州佐夜の中山にあり。むかし孕婦この所にて盗賊のために害せられ、子は胎胞の内に恙なく、幸に生長してその讎を報しとかや。



芭蕉精（ばしようのせい）

もろこしにて芭蕉（ばせを）の精（せい）人と化（け）して物語（ものがたり）せしことあり。今の謡物（うたひもの）はこれによりて作（つく）れるとぞ。



硯の魂

ある人赤間が関の石硯をたくはへて文房の一友とす。ひと日平家物語をよみさして、とろとろと居ねぶるうち、案頭の硯の海の波さかだちて、源平のたゝかひ今みることくあらはれしとかや。もろこし徐玄之が紫石潭も思ひあはせられ侍り。



屏風闚（びょうぶのぞき）

翠帳紅閨（すいてうこうけい）に枕（まくら）をならべ、顚鸞倒鳳（てんらんたうほう）の交（まぢはり）あさからず、枝（えだ）をつらね翼（はね）をかはさんとちかひし事も佗（あだ）となりし胸（むね）三寸の恨（うらみ）より、七尺の屏風も猶のぞくべし。

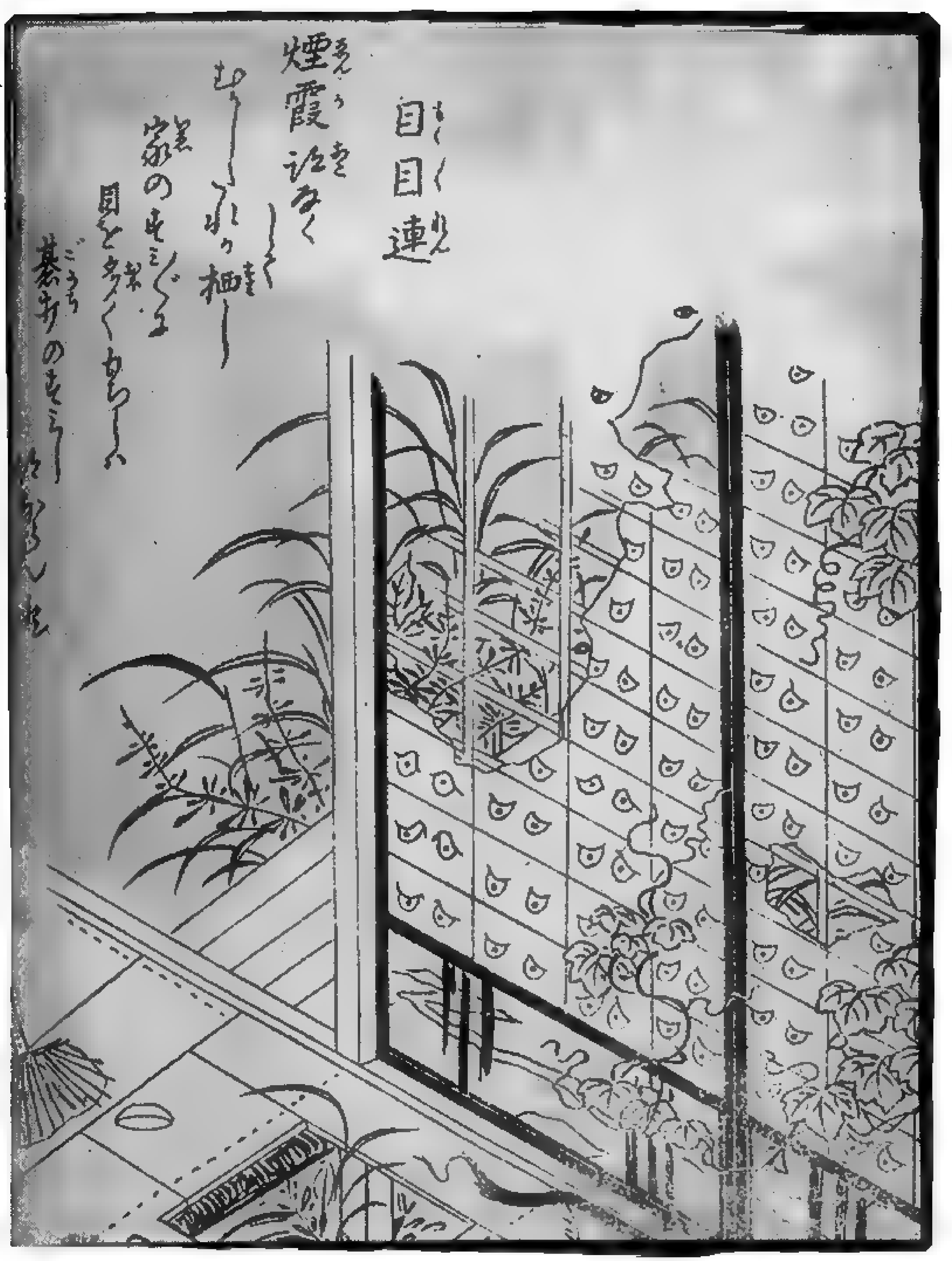


山姥（やまうば）



毛羽毛現（けうけげん）

毛羽毛現は惣身に毛生ひたる事毛女のごとくなればかくいふか。或は希有希見とかきて、ある事まれに、見る事まれなればなりとぞ。



目目連

煙霞跡なくして、むかしたれか栖し家のすみずみに目を多くもちしは、碁打のすみし跡ならんか。



狂骨（きょうこつ）

狂骨（きやうこつ）は井中（せいちう）の白骨（はくこつ）なり。世（よ）の諺（ことはざ）に甚（はなはだ）しき事をきやうこつといふも、このうらみのはなはだしきよりいふならん。



目競

大政人道清盛ある夜の夢に、されかうべ東西より出てはじめは二つありけるが、のちには十、二十、五十、百、千、万、のちにはいく千万といふ数をしらず。入道もまけずこれをにらみけるに、たとへば人の目くらべをするやう也しよし。平家物語にみえたり。



後神

うしろ神は臆病神につきたる神也。前にあるかとすれば、忽焉として後にありて、人のうしろがみをひくといへり。



否哉

むかし漢の東方朔、あやしき虫をみて怪我と名づけしためしあり。今この否哉もこれにならひて名付たるなるべし。



方相氏（ほうそうし）

論語曰、郷人儺朝服而立二於阼階一
註儺所二以逐レ疫 周礼方相氏掌レ之。

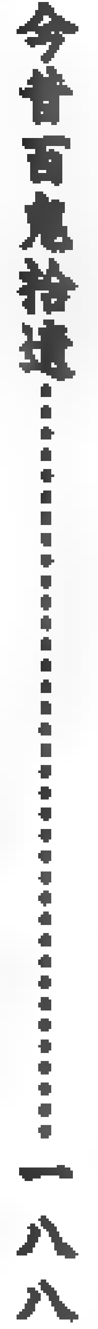
滝霊王（たきれいおう）

諸国（しょこく）の滝（たき）つぼよりあらはるゝと云。青龍疏（せいりうそ）に、一切（いつさい）の鬼魅諸障（きみしよせう）を伏（ふく）すと云々。



白沢（はくたく）

黄帝東巡　白沢一見　避怪除害　靡所不徧
摸捫竊賛



隠里（かくれざと）



犬神・白児



百器徒然袋

百器徒然袋序

嘗つて社樹を以て俳諧と為すや、之を遠望すれば峨々として春天を払ひ、就て之を視れば其の根則ち群狐の託する所。此の語に相当するは石燕即ち其の人なり。天台の西に顕れ、古社の下に隠れ、而して万鬼を伏倚し、怪状を図画して世俗を驚駭せしむ。是に由つて遂に以て老狐の名を負ふ。亦た宜からずや。今春復し、亦た此図を請ふ者多し。図せば則ち謝混の俳する所と為り、画せざれば則ち江庵の筆を還すに似たり。嗚呼、之を如何せん。寧ろ我をして身後の名有らしむるは、即時一盃の酒に如かず。是が為に吾の好む所に従ひて、自ら斯の技を楽しむ。此れも一時なり。是に於て智嚢を発き、才器に任す。霊影を採摭し、図以て三巻と為す。百器徒然袋と題す。而して予の序を請ふ。予先に并に序する所、言に於て得ざるは憑婦の如きなり。士為る者の之を笑ふを免れず。今三界に当りて其の可ならざるを知る。而して義に之くに止らず、勢勇の前に在りて序す。

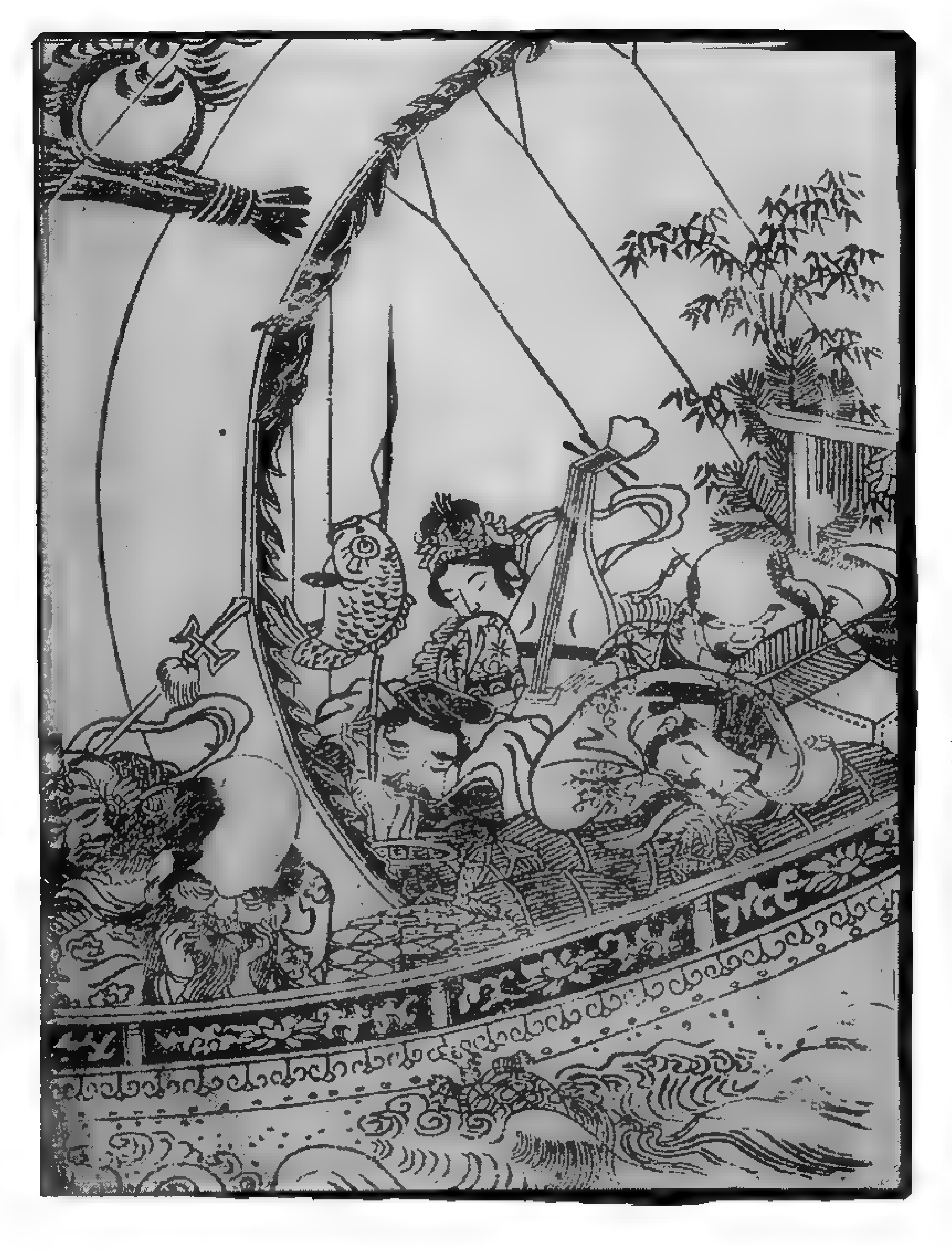
天明四甲辰春　元洲滕武幹

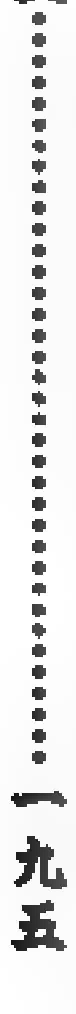
百器徒然袋



- ◎宝船（たからぶね）
- ◎塵塚怪王（ちりづかかいおう）
- ◎文車妖妃（ふぐるまようひ）
- ◎長冠（おさこうぶり）
- ◎沓頬（くつつら）
- ◎ばけの皮衣（かわごろも）
- ◎絹狸（きぬたぬき）
- ◎古籠火（ころうか）
- ◎天井嘗（てんじょうなめ）

- ◎白容裔（しろうねり）
- ◎骨傘（ほねからかさ）
- ◎鉦五郎（しょうごろう）
- ◎払子守（ほっすもり）
- ◎栄螺鬼（さざえおに）







ながき世のとをのねぶりの





塵塚怪王

それ森羅万象およそかたちをなせるものに長たるものなきことなし。麟は獣の長、鳳は禽の長たるよしなれば、このちりづか怪王はちりつもりてなれる山姥とうの長なるべしと、夢のうちにおもひぬ。



文車妖妃（ふぐるまようひ）

歌に、古しへの文見し人のたまなれやおもへばあかぬ白魚（しみ）となりけり。かしこき聖（ひじり）のふみに心をとめしさへかくのごとし。ましてや執着（しうぢゃく）のおもひをこめし千束の玉章（づさ）には、かゝるあやしきかたちをもあらはしぬべしと、夢の中におもひぬ。



鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集



猫(ねこ)また





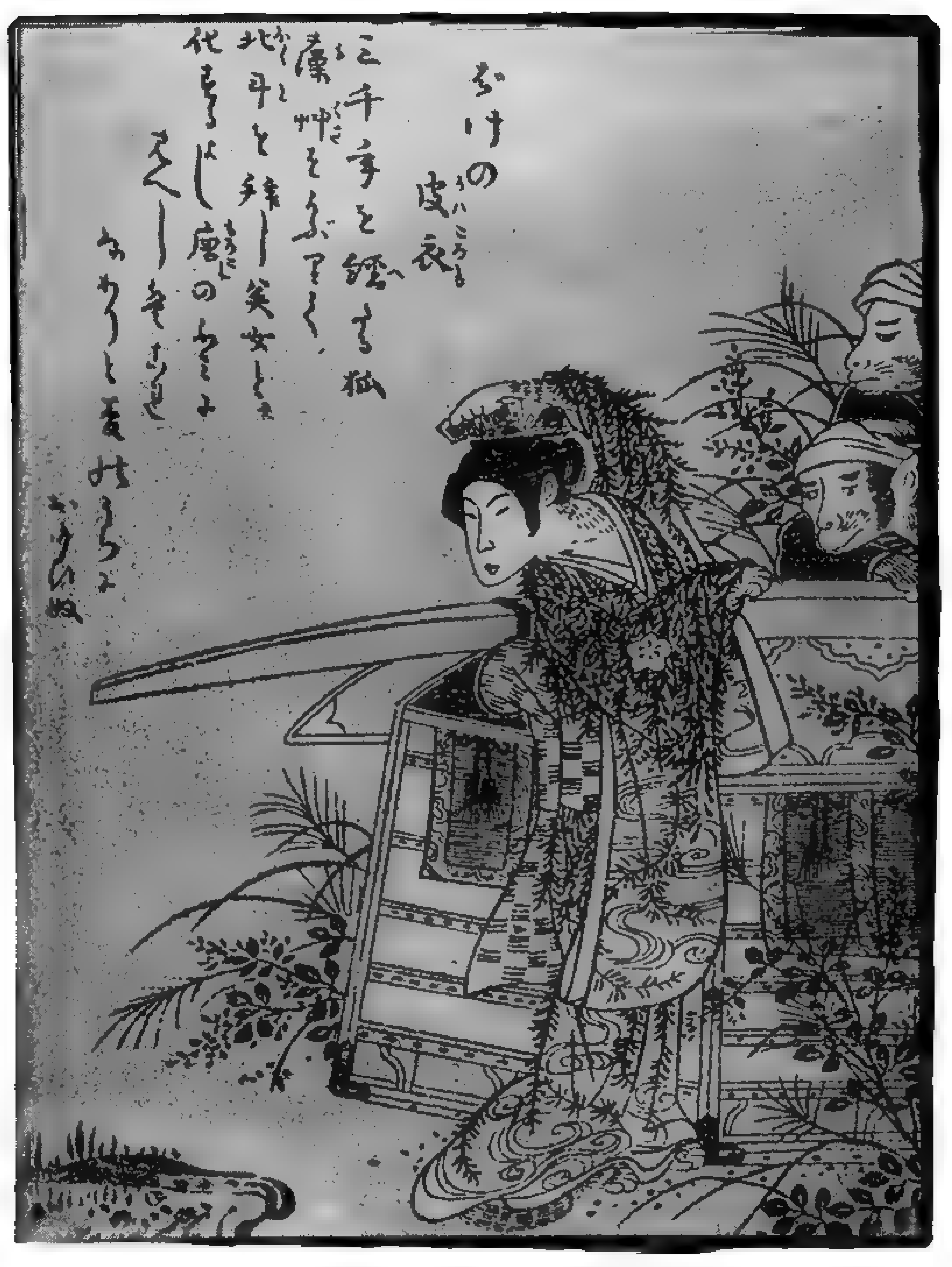
長冠（おさこうぶり）

東都の城門にかけて世をのがれし賢人の冠にはあらで、このてがしはのふたおもてありし佞（ねぢけ）人のおもかげならんかしと、夢ごゝろにおもひぬ。



沓頬

鄭瓜州の瓜田に怪ありて、瓜を喰ふ霊隠寺の僧これをきゝて符をあたふ。是を瓜田にかくに、怪ながくいたらず。のち其符をひらき見るに、李下不レ正レ冠の五字ありと。かつてこの怪にやと、夢のうちにおもひぬ。



ばけの皮衣(かわごろも)

三千年を経(へ)たる狐、藻艸(もぐさ)をかぶりて北斗(ほくと)を拝し、美女と化するよし、唐(もろこし)のふみに見へしはこれなめりと、夢のうちにおもひぬ。



絹狸（きぬたぬき）

腹（はら）つゞみをうつと言へるより、衣うつなる玉川の玉にゑんある八丈のきぬ狸とは化（ばけ）しにやと、ゆめの中におもひぬ。



古籠火

それ火に陰火、陽火、鬼火さまざまありとぞ。わけて古戦場には汗血のこりて鬼火となり、あやしきかたちをあらはすよしを聞はべれども、いまだ燈籠の火の怪をなすことをきかずと、夢の中におもひぬ。



天井嘗（てんじょうなめ）

天井の高は燈（ともしび）くろうして冬さむしと言へども、これ家さくの故にもあらず。まつたく此怪（くわい）のなすわざにて、ぞつとするなるべしと、夢のうちにおもひぬ。



白容裔（しろうねり）

白うるりは徒然（つれづれ）のならいなるよし。この白うねりはふるき布巾（ふきん）のばけたるものなれども、外にならいもやはべると、夢のうちにおもひぬ。



骨傘

北海に鴟吻と言へる魚あり。かしらは龍のごとく、からだは魚に似て、よく雲をおこし雨をふらすと。このからかさも雨のゑんによりてかゝる形をあらはせしにやと、夢のうちにおもひぬ。



鉦五郎（しようごろう）

金（こがね）の雞（にはとり）は淀屋（よどや）辰五郎が家のたからなりしよし。此かねも鉦五郎と言へるからは、金にてやありけんと、夢のうちにおもひぬ。



河童（かつぱ）

川太郎ともいふ。



払子守

趙州無の則に、狗子にさへ仏性ありけり。まして伝燈をかゝぐる坐禅の床に、九年が間うちふつたる払子の精は、結加趺坐の相をもあらはすべしと、夢のうちにおもひぬ。



栄螺鬼（さざえおに）

雀海中に入てはまぐりとなり、田鼠（でんそ）化して鶉（うづら）となるためしもあれば、造化（ぞうくわ）のなすところ、さゞえも鬼になるまじきものにもあらずと、夢心におもひぬ。



- ◯鎗毛長（やりけちょう）
- ◯虎隠良（こいんりょう）
- ◯禅釜尚（ぜんふしょう）
- ◯鞍野郎（くらやろう）
- ◯鐙口（あぶみくち）
- ◯松明丸（たいまつまる）
- ◯不々落々（ぶらぶら）
- ◯貝児（かいちご）
- ◯髪鬼（かみおに）

- ◯角盥漱（つのはんぞう）
- ◯袋狢（ふくろむじな）
- ◯琴古主（ことふるぬし）
- ◯琵琶牧々（びわぼくぼく）
- ◯三味長老（しゃみちょうろう）
- ◯襟立衣（えりたてごろも）
- ◯経凛々（きょうりんりん）
- ◯乳鉢坊（にゅうばちぼう）
- ◯瓢箪小僧（ひょうたんこぞう）

- ◯木魚達摩（もくぎょだるま）
- ◯如意自在（にょいじざい）
- ◯暮露々々団（ぼろぼろとん）
- ◯箒神（ははきがみ）
- ◯蓑草鞋（みのわらじ）





禅釜尚　茶は閑寂を事とするものから、陰気ありてかゝる怪異もありぬべし。文福茶釜のためしもや、ともに夢の中に思ひぬ。



鎗毛長・虎隠良・禅釜尚

鎗毛長　日本無双の剛の者の手にふれたりし毛鑓にや。怪しみを見てあやしまず。まづ先がけやの手がらをあらはす。／虎隠良　たけき獣の革にて製したるきんちやくゆへにや、そのときこと千里をはしるがごとし。／



鞍野郎

保元の夜軍に鎌田政清手がらをなせしも我ゆへなれば、いかなる恩をもたぶべきに、手がたをつけんと前輪のあたりをきりつけらるれば、気も魂もきへぎへとなりしとおしみて[redacted]ふ声いとおもしろく、夢のうちにおもひぬ。



鐙口（あぶみくち）

膝（ひざ）の口をのぶかにいさせてあぶみを越しておりたゝんとすれども、なんぎの手なればと、おなじくうたふと、夢心におぼへぬ。



松明丸（たいまつまる）

松明の名はあれども、深山幽谷（しんざんゆうこく）の杉の木ずゑをすみかとなせる天狗つぶての石より出る光にやと、夢心におもひぬ。



不々落々（ぶらぶら）

山田もる提灯の火とは見ゆれども、まことは蘭ぎくにかくれすむ狐火なるべしと、ゆめのうちにおもひぬ。



貝児（かいちご）

貝おけ逗子など言へるは、やんごとなき御かたの調度にして、しばらくもはなるゝこと無れば、この貝児は逗子の兄弟（はらから）にやと、おぼつかなく夢心に思ひぬ。



獺（かわうそ）



髪鬼

身体髪膚は父はゝの遺躰なるを、千すじの落髪を泥土に汚したる罪に、かゝるくるしみをうくるなりと言ふを、夢ごゝろにおぼへぬ。



角盥漱（つのはんぞう）

なにを種とてうき艸のうかみもやらぬ小野の小町がそうしあらいの執心なるべしと、夢心におもひぬ。



袋貉（ふくろむじな）

穴のむじなの直をするとは、おぼつかなきことのたとへにいへり。袋のうちのむじなも同じことながら、鹿を追ふ猟師のためには、まことに袋のものをさぐるがごとくならんと、夢のうちにおもひぬ。



琴古主（ことふるぬし）

八橋とか言へる瞽（こ）しやのしらべをあらためしより、つくし琴（ごと）は名のみにして、その音いろをきゝ知れる人さへまれなれば、そのうらみをしらせんとてか、かゝる姿をあらはしけんと、夢心におもひぬ。



琵琶牧々（びわぼくぼく）

玄上牧馬（げんぼくば）と言へる琵琶はいにしへの名器にして、ふしぎたびたびありければ、そのぼく馬のびはの転にして、ぼくぼくと言ふにやと、夢のうちにおもひぬ。



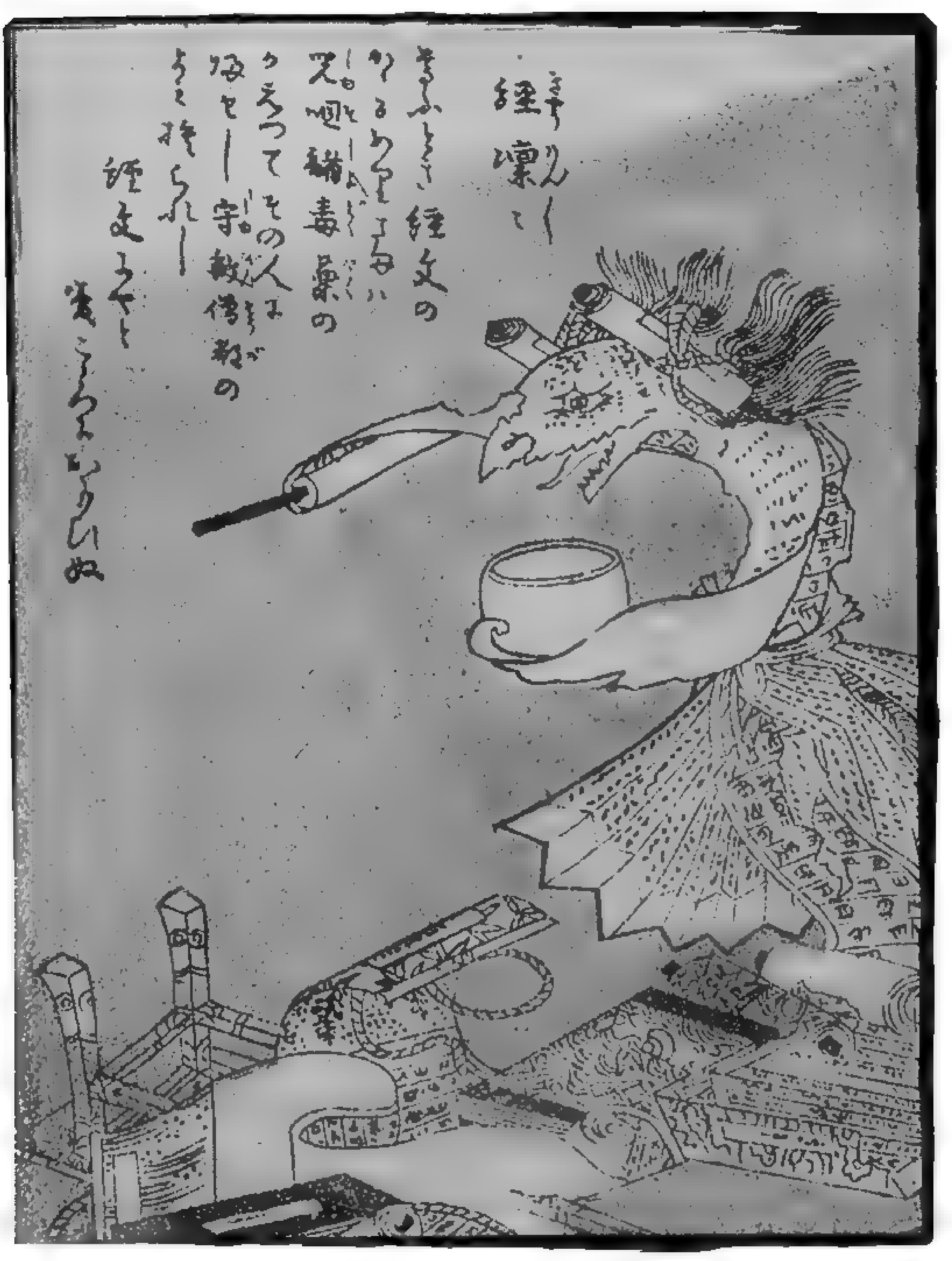
三味長老（しやみちようろう）

諺（ことはざ）に沙弥（しやみ）から長老（ちやうらう）にはなられずとは、沙弥渇食（かつじき）のいやしきより、国師（こくし）長老の尊（たつとき）にはいたりがたきのたとへなれども、是はこの芸（げい）にかんのうなる人の此みちの長たるものと用ひられしその人の器（うつは）の精（せい）なるべしと、夢の中に思ひぬ。



襟立衣（えりたてごろも）

彦山（ひこ）の豊前坊（ぶぜんぼう）、白峯の相摸坊（さがみ）、大山の伯耆坊、いづなの三郎、富士太郎、その外木の葉天狗まで、羽団扇（はうちは）の風にしたがひなびくくらまの山の僧正坊のゑり立衣なるべしと、夢心におもひぬ。



経凛々

尊ふとき経文のかゝるありさまは、呪咀諸毒薬のかえつてその人に帰せし守敏僧都のよみ捨られし経文にやと、夢ごゝろにおもひぬ。



乳鉢坊・瓢簞小僧

へうたん小僧に肝を消して青ざめたりしが、乳ばち坊の泉ばちのおとに夢さめぬとおもひぬ。



木魚達摩（もくぎよだるま）

杖払（じやうほつ）木魚客板（かくばん）など、禅床（ぜんしやう）ふだんの仏具なればゝ、かゝるすがたにもばけぬべし。払子守（ほつすもり）とおなじきものかと、夢のうちにおもひぬ。



垢（あか）嘗（なめ）



如意自在

如意は痒ところをかくに、おのれがおもふところにとゞきて心のごとくなるよりの名なれば、かく爪のながきも痒ところへ手のとゞきたるばけやうかなと、夢心に思ひぬ。



暮露々々団（ぼろぼろとん）

普化禅宗を虚無僧と言ふ。虚無空じやくをむねとして、いたるところ薦むしろに座してもたれりとするゆへ、また薦僧とも言ふよし。職人づくし歌合に、暴露暴露ともよめれば、かの世捨人のきふるせるぼろぶとんにやと、夢の中におもひぬ。



箒神（ははきがみ）

野わけはしたなく吹けるあした、林かんに酒をあたゝむるとて、朝きよめの仕丁のはきあつめぬるはゝきにやと、夢心におもひぬ。



蓑草鞋

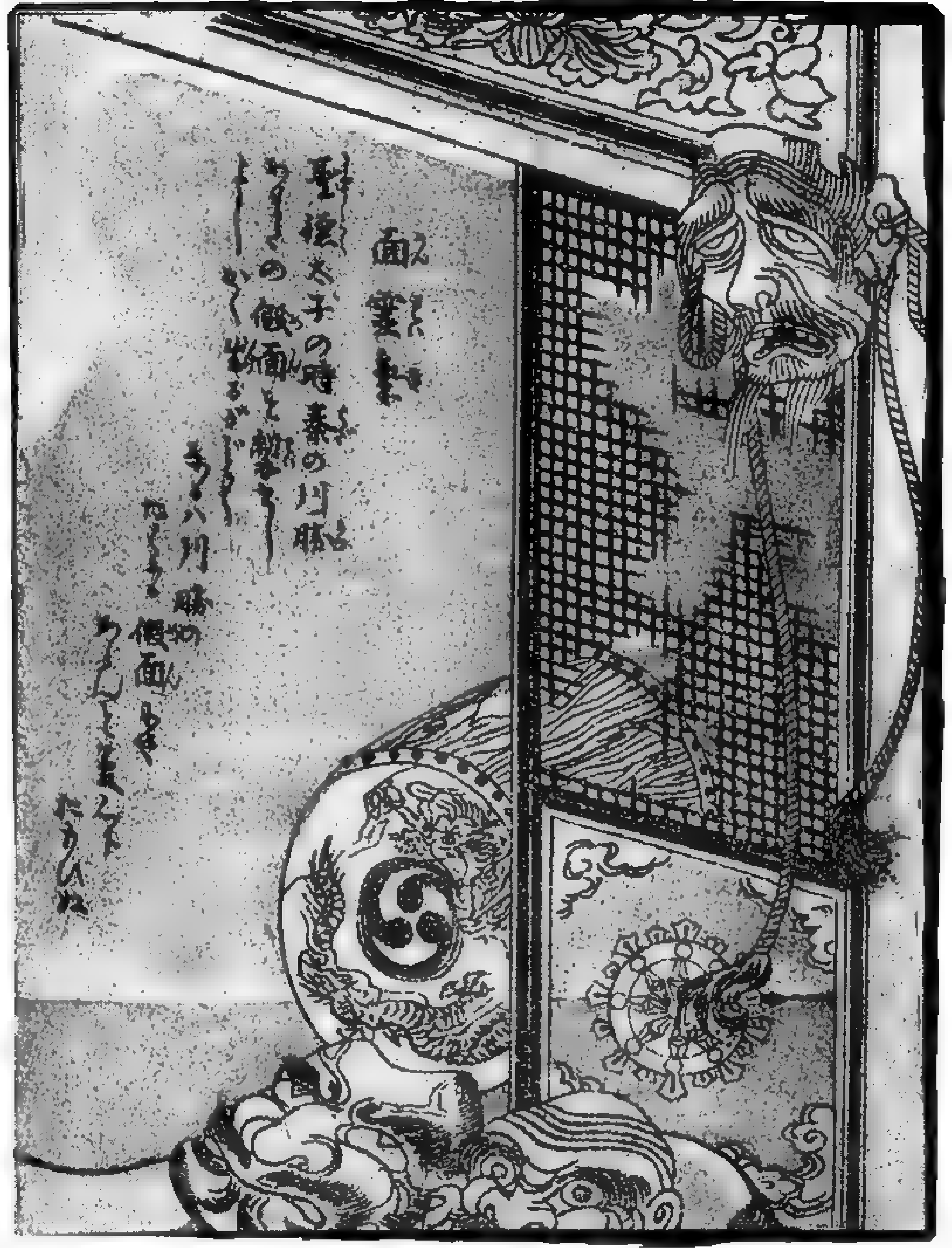
雪は鵝毛に似て飛でさんらんし、人は鶴 裳をきてたつて徘 徊せし、そのふる蓑の妖くはゐにやと、夢の中におもひぬ。

百器徒然袋



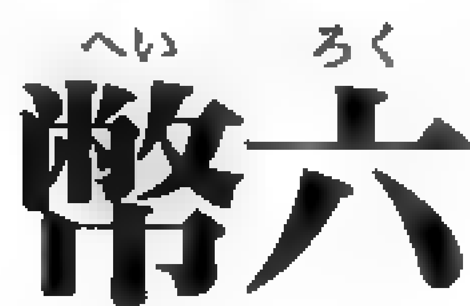
- ◎面霊気（めんれいき）
- ◎幣六（へいろく）
- ◎雲外鏡（うんがいきょう）
- ◎鈴彦姫（すずひこひめ）
- ◎古空穂（ふるうつぼ）
- ◎無垢行騰（むくむかばき）
- ◎猪口暮露（ちょくぼろん）
- ◎瀬戸大将（せとだいしょう）
- ◎五徳猫（ごとくねこ）

- ◎鳴釜（なりがま）
- ◎山颪（やまおろし）
- ◎瓶長（かめおさ）
- ◎宝船（たからぶね）

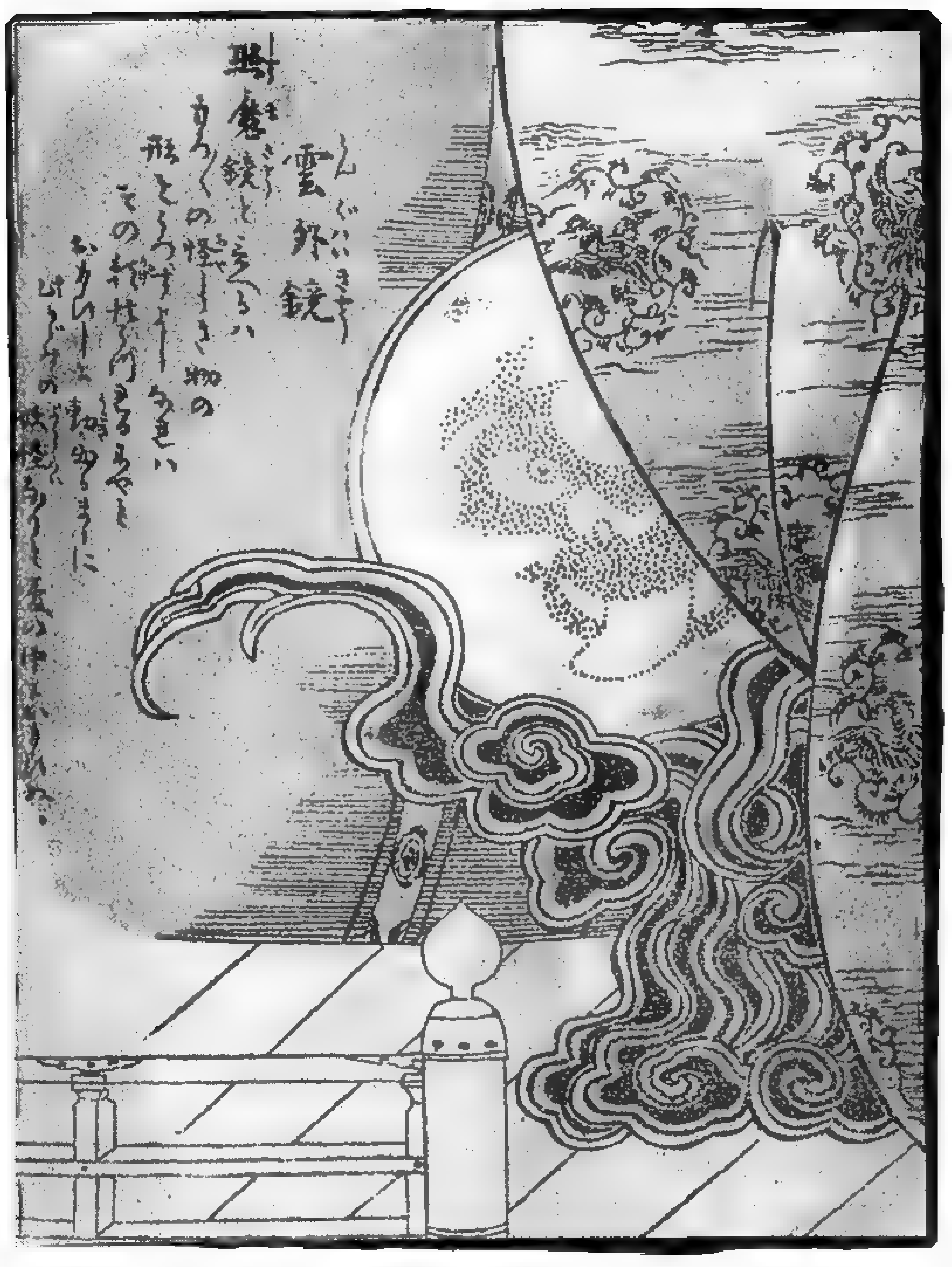


面霊気

聖徳太子の時、秦の川勝あまたの仮面を製せしよし。かく生るがごとくなるは、川勝のたくめる仮面にやあらんと、夢心におもひぬ。



花のみやこに社さだめず、あらぶるこゝろまします、神のさわぎ出給ひしにやと、夢心におもひぬ。



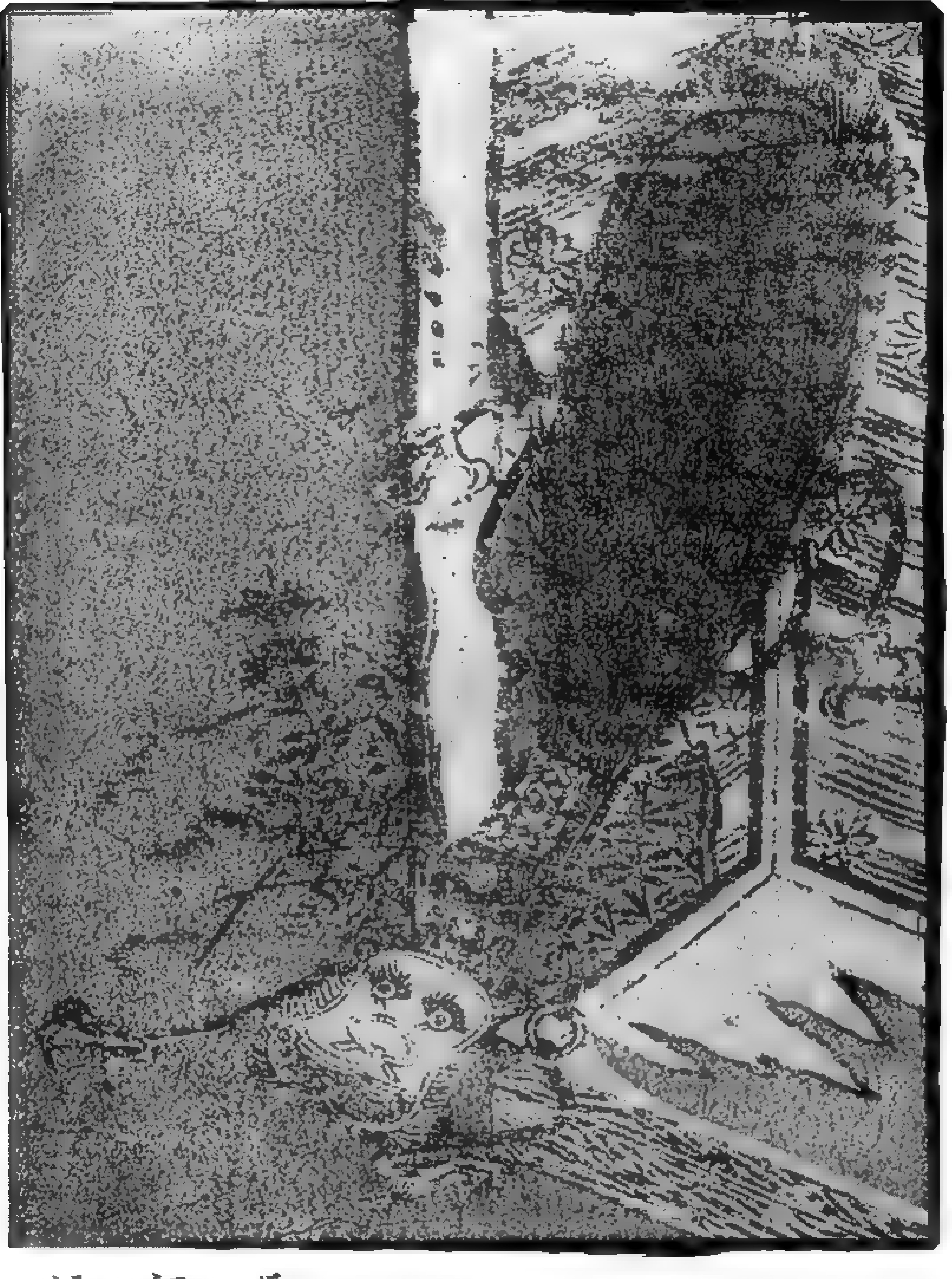
雲外鏡

照魔鏡と言へるは、もろもろの怪しき物の形をうつすよしなれば、その影のうつれるにやとおもひしに、動出るまゝに、此かゞみの妖怪なりと、夢の中におもひぬ。

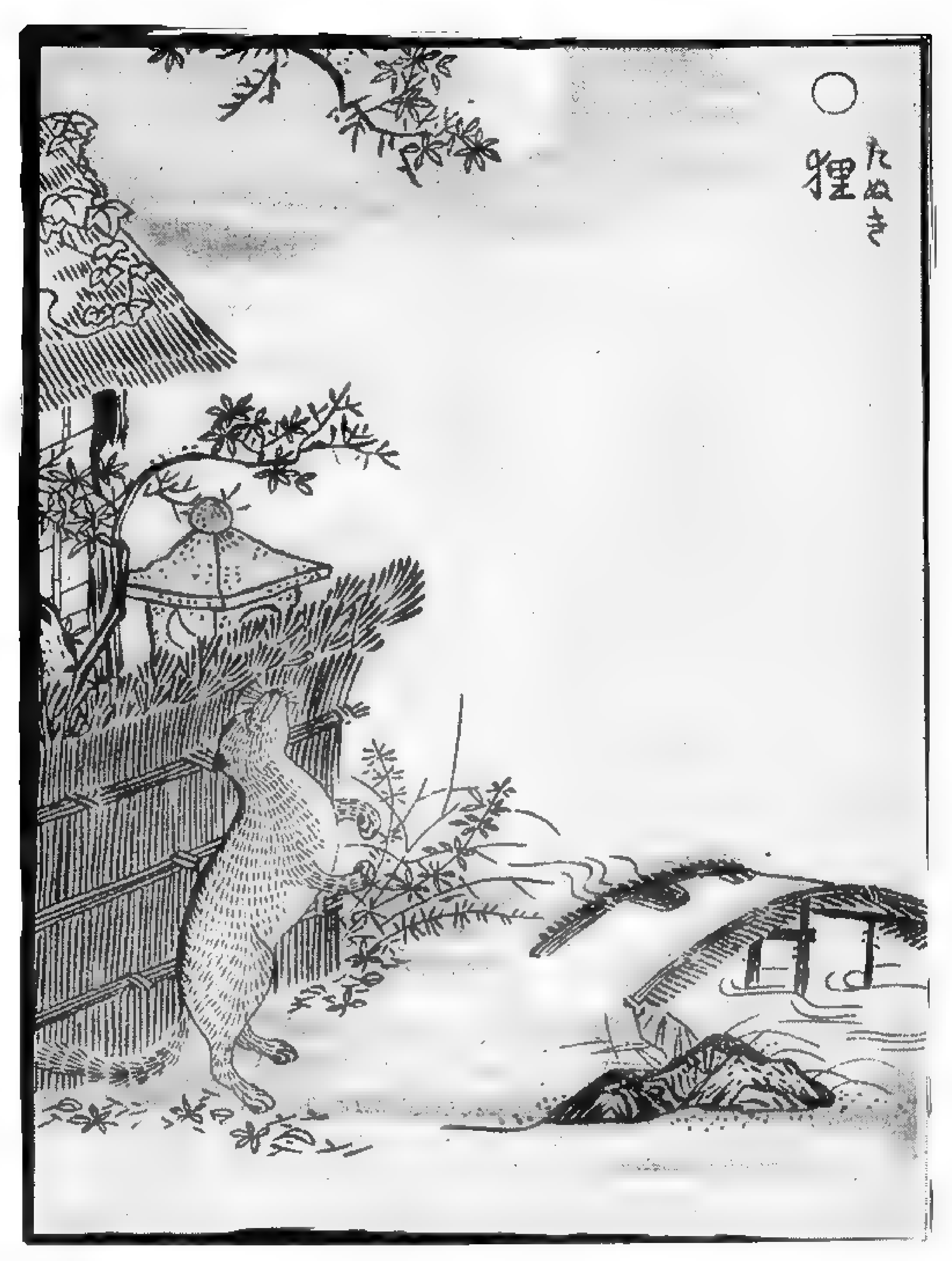


鈴彦姫（すずひこひめ）

かくれし神を出し奉んとて岩戸のまへにて神楽（かぐら）を奏（そう）し給ひし天鈿女（あまのうずめ）のいにしへもこひしく、夢心におもひぬ。



古空穂（ふるうつぼ）

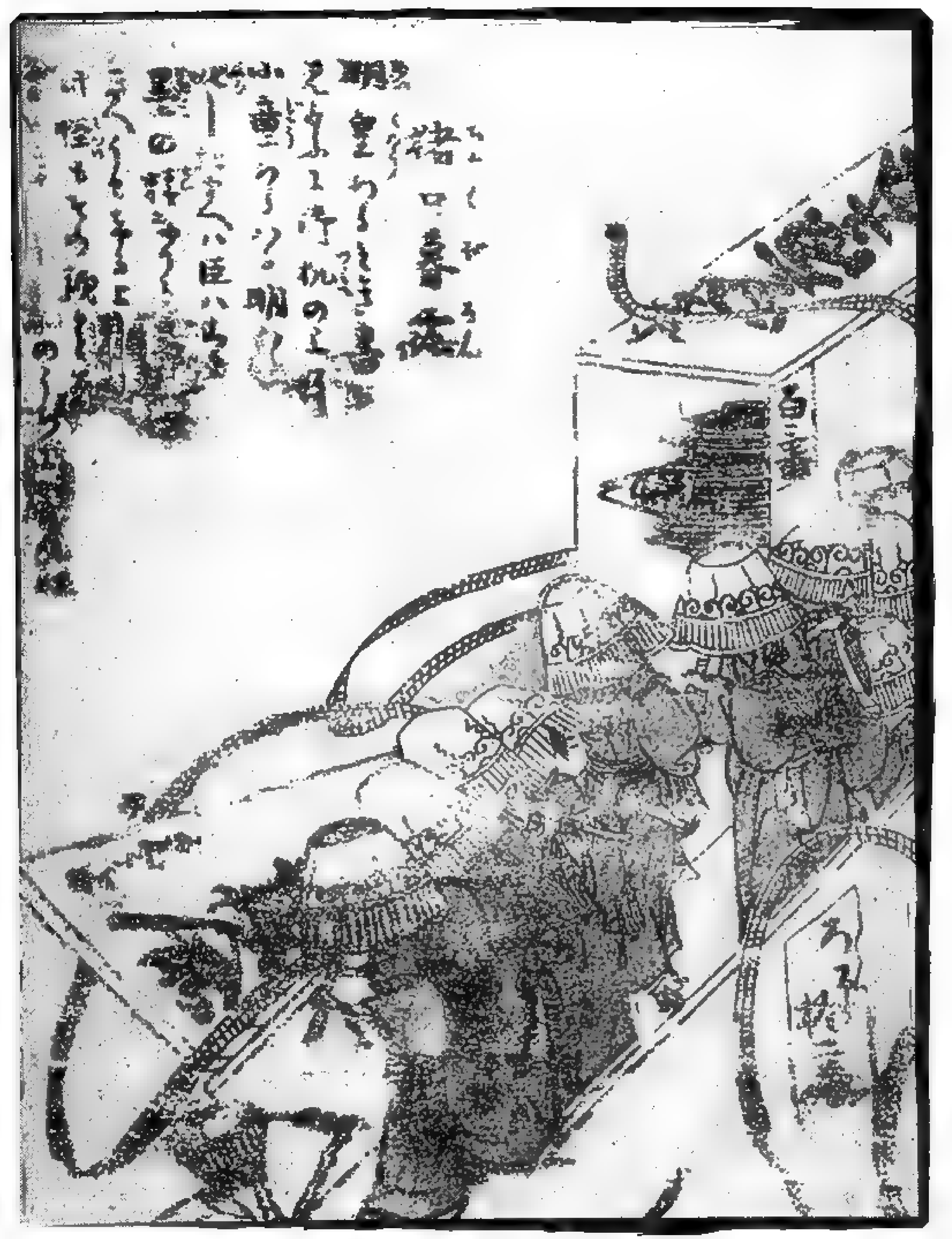


狸（たぬき）



無垢行縢（むくむかばき）

赤沢（あかさは）山の露ときへし河津の三郎が行縢にやと、夢心に思ひぬ。



猪口暮露

明皇あるとき書を見給ふに、御机の上に小童あらはる。明皇叱したまへば、臣はこれ墨の精なりと奏してきへうせけるよし。此怪もその類かと、夢のうちにおもひぬ。



瀬戸大将(せとだいしよう)

槊(ほこ)をよこたへて詩を賦せし曹孟徳(そうもうとく)にからつやきのからきめ見せし燗鍋(かんなべ)の寿亭侯(じゆていこう)にや。蜀江(しよくこう)のにしき手を着(き)たりと、夢のうちにおもひぬ。



五徳猫（ごとくねこ）

七とくの舞をふたつわすれて、五徳（ごとく）の官（くは）者と言ひしためしもあれば、この猫もいかなることをか忘れけんと、夢の中におもひぬ。



鳴釜（なりがま）

白沢避怪図曰　飯甑作レ声鬼名二斂女一　有二此怪一則呼二鬼名一　其怪忽自滅

夢のうちにおもひぬ。



山颪（やまおろし）

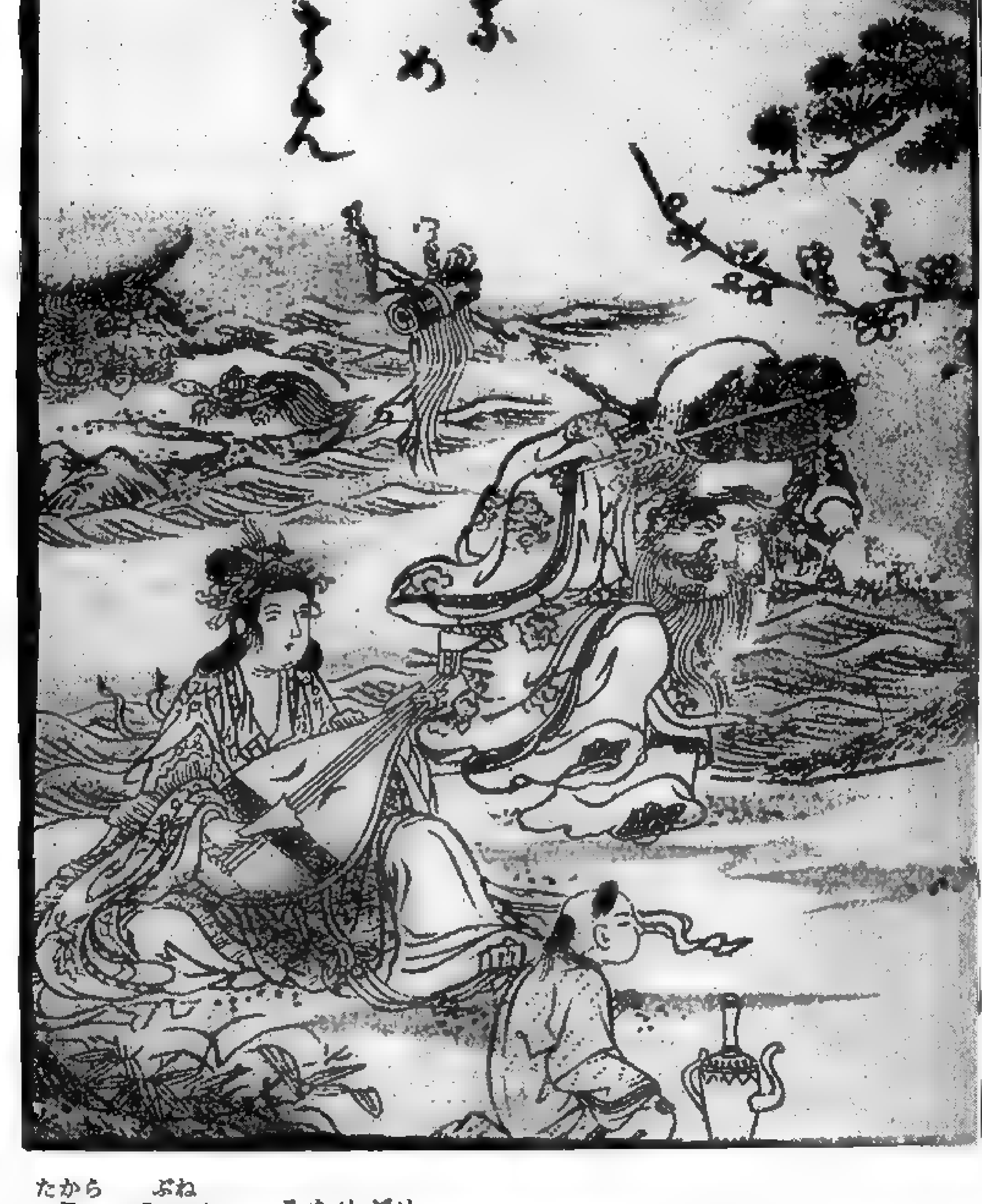
豪猪（ごうちょ）といへる獣（けもの）あり。山おやじと言ひて、そう身の毛はりめぐらし、此妖怪（ようくわい）も名とかたちの似たるゆへにかく言ふならんと、夢心におもひぬ。



瓶長（かめおさ）

わざわひは吉事のふくするところと言へば、酌（くめ）どもつきず、飲どもかはらぬめでたきことを、かねて知らする瓶長（かめおさ）にやと、夢のうちにおもひぬ。





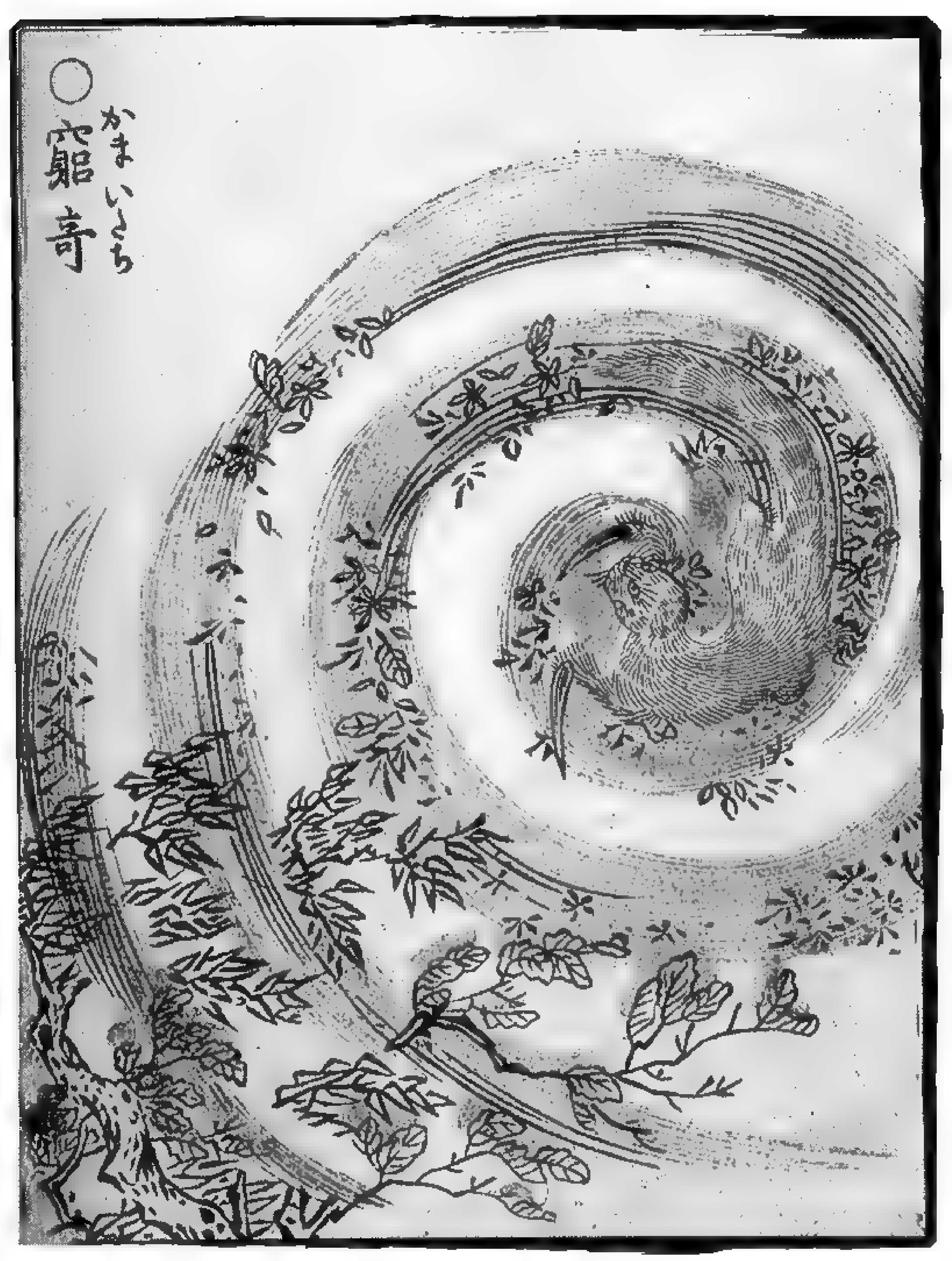
宝船（たからぶね）

みなめざめ



宝船（たからぶね）

波のり船のおとのよきかな



窮奇（かまいたち）



解説　妖怪絵師「鳥山石燕」の意図

多田克己

鳥山石燕（とりやませきえん）は姓を佐野、名を豊房といいます。正徳二年（一七一二）生まれの江戸の人で、天明八年（一七八八）八月三日に七十七歳で没しています。石燕は狩野玉燕（かのうぎょくえん）季信（あるいは狩野周信）に学んだ狩野派の画家です。狩野派とは室町時代後期の、狩野元信（もとのぶ）（または狩野正信（まさのぶ）の説もあり）を祖とする、幕府御用絵師を多く輩出した、日本の代表的な画派です。石燕は代々幕府の御坊主である家系に生まれ、経済的には恵まれたらしいことがわかっています。しかも石燕が絵師として作品を残すようになったのは、四十歳代以降で、「画図百鬼夜行」シリーズのような、主たる版本画は六十歳代以降と異例的に遅いものでした。彼の友人である大田南畝（おおたなんぽ）の随筆によれば、石燕は根津（現在の東京都文京区）に庵を編み、隠居仕事で絵を描いていたそうです。収入のために描いていたのではなく、自己表現の手段として絵画を嗜（たしな）んでいたらしいのです。現存している作品をしらべると、もっとも好んだ題材が妖怪でした。

妖怪を描くのにあたって、石燕がわざわざ狩野派を学んだのには理由があります。近世

になって石燕以外のさまざまな画家も妖怪画を残していますが、そうした妖怪画を始めた画家も狩野派の祖、狩野元信といわれています。しかも『百鬼夜行絵巻』を描いたといわれる土佐光信（土佐派の代表的存在で、宮廷の絵所預）は元信から狩野派の中国的な作風を学び、さらに元信と姻戚関係になったとされます。すなわち日本で最高の妖怪画を描くためにも、石燕が狩野派画家となることは必須の条件であったと思われます。それほどまでして本格的な妖怪が描きたかったのでしょうか。

幕府御用絵師の多い狩野派は、縁起を祝うものやさまざまな故事を題材にしたものを要求されたことから、技術的な画力以上に日本、中国を問わず、さまざまな古典に精通していなければなりませんでした。その中でも石燕は、当時の江戸の文化人が一目を置くほどの博学者であったようです。それは「百鬼夜行」シリーズ『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』『今昔百鬼拾遺』『百器徒然袋』に書かれている添書にもにじみ出ています。その引用されたと思われる書籍は次のように大別できます。

① 日本の古典／伊勢物語、宇治拾遺物語、古今著聞集、今昔物語集、徒然草、枕草子など
② 和歌／古今和歌集、万葉集など
③ 軍記物語／源平盛衰記、曾我物語、太平記、平家物語など
④ 近世の怪談集／御伽百物語、怪談全書、奇異雑談集、諸国百物語、剪灯新話、曾呂利物語、太平百物語、百物語評判など

⑤ 浮世草子／好色一代男、西鶴諸国ばなし、金々先生栄花夢など
⑥ 仏教説話集／勧化一声電、輟耕録、発心集など
⑦ 中国の古典／三国志演義、周礼、小説、春秋左氏伝、神仙伝、山海経、荘子、捜神記、抱朴子、文選、酉陽雑俎、礼記、列仙伝、論語など
⑧ 本草書（漢方薬書）、博物学書／本草綱目、和漢三才図会など
⑨ その他／七十一番職人歌合、風姿花伝など

そのほかに随筆集から各地の伝説や民間伝承を取材してもいます。さらに石燕は能のテキストである、次のような謡曲からも引用しています。

葵上、安達原（黒塚）、大江山、翁、鉄輪、関羽、菊慈童、黒主、鞍馬天狗、鍾馗、猩猩、殺生石、高砂、土蜘蛛、道成寺、鵺、橋姫、芭蕉、鉢木、花筐、紅葉狩、頼豪、羅生門などですが、どの妖怪になんの謡曲が対応しているのかをしらべるだけで、現代人にはちょっとした教養が身につくと思います。『百器徒然袋』には四十八種の妖怪が紹介されていますが、それが全て能、浄瑠璃、歌舞伎のいずれかの芝居物語と結びついているらしいのです。

すると石燕の「百鬼夜行」シリーズとは、勉強しなければおもしろくないものなのでしょうか。その答は違うと思います。たとえば「百々目鬼」という妖怪は手長（盗みぐせのある人の意）な女で掏摸師だったため、鳥目（鳥の目のような孔のある意で銅銭の意）の

精が腕に付いて祟られたとありますが、これはお金を「御足」とも呼ぶことから、足が付いて手に罹る（犯罪事実の手がかりが見つけられて、いやな目にあう）という意味にひっかけた石燕の洒落でした。そんなひどい目に百回も遭った、弱り目に祟り目（困ったときにさらによくない事が重なる意）ならば、さっさと掏摸の「足を洗えばいい」というわけです。つまり百々目鬼とは妖怪でもなんでもない石燕の創作で、漫画的な表現だったのです。「百鬼夜行」シリーズには全部で二百数体ほどの妖怪が紹介されていますが、そのうち三分の一ほどが石燕によるお遊びです。読者もどれがそうなのか見つけ出してください。

石燕は戯作者である大田南畝と同じく、江戸の狂歌師で、他の狂歌師とも交流がありました。狂歌とはうわべは高尚な和歌や漢詩のふりをして、内容は諧謔（戯言）と滑稽を詠んだ短歌です。この狂歌を初めて絵画表現にとり入れたのは石燕の弟子である歌川豊春といわれますが、師匠である石燕がすでに自分の作品の中で表現していたらしいのです。

洒落好きの石燕は死んでもその身体で洒落を表現したようです。七十七歳で没して鬼籍に入った石燕は、浅草光明寺（東京都台東区元浅草四丁目）に葬られましたが、この場所は江戸城本丸から見て正確な鬼門（東北）の位置にあったのです。

（平成十七年六月）

索引

か

き

く

け

こ

さ



て

と

な

に

ぬ

ね

の

は

ひ



網剪（あみきり）

図版クレジット

■画図百鬼夜行
所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二

■今昔画図続百鬼
所蔵：東北大学附属図書館

■今昔百鬼拾遺
（雲・雨）
所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二
（霧）
所蔵：日比野聖巳
撮影：ツートップ／鴨下誠

■百器徒然袋
所蔵：川崎市市民ミュージアム
撮影：奥西淳二

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕



角川文庫 13881

平成十七年七月二十五日　初版発行
平成十九年二月二十日　九版発行

発行者―井上伸一郎

発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・編集（〇三）三二三八―八五五五
〒一〇二―八〇七八

発売元―株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・営業（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
http://www.kadokawa.co.jp

印刷所―旭印刷　製本所―BBC

装幀者―杉浦康平

Printed in Japan

角川ソフィア文庫 319　ISBN4-04-405101-1　C0195

角川文庫発刊に際して

角川源義

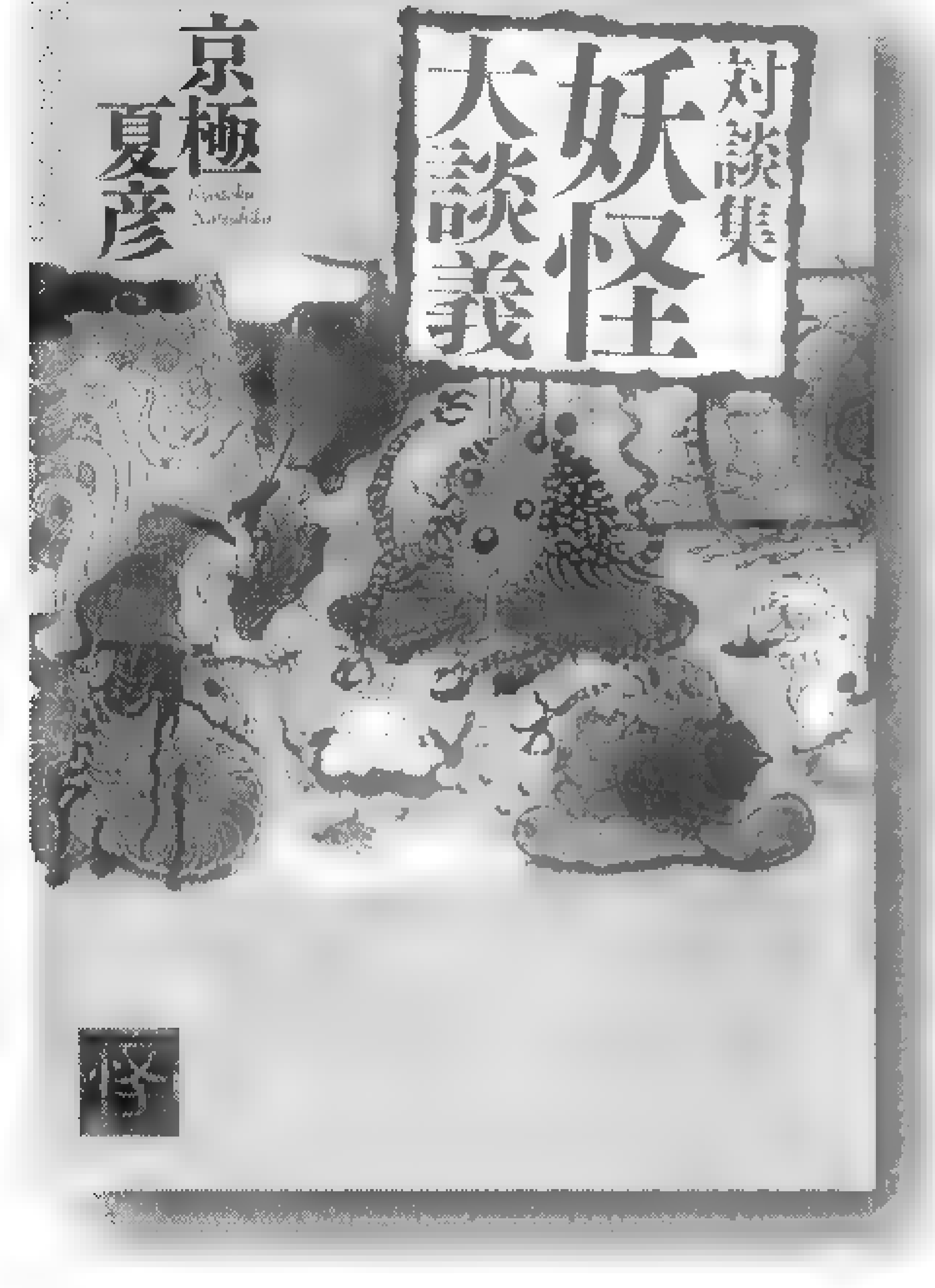
第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

怪

大いに怪を語る。



対談集 妖怪大談義 京極夏彦

各界の「怪しいものには一家言ある」御仁たち15人と語りに語った、京極夏彦初の対談集！

四六判上製◆角川書店

水木しげる
養老孟司
中沢新一
夢枕獏
アダム・カバット
宮部みゆき
山田野理夫
大塚英志
手塚眞
高田衛
保阪正康
唐沢なをき
小松和彦
西山克
荒俣宏

小松和彦の本

古来、未知のものに対する恐れを異界の物語に託してきた日本人。時間の流れが歪む向こう側の世界で繰り広げられた酒呑童子、浦嶋太郎、七夕の伝説や義経の「虎の巻」など数多の物語を絵巻から読み解き、日本人の隠された精神生活にせまる、画期的異界論。

絵物語の想像力
異界と日本人
小松和彦

異界を覗くと、
日本人の想像力が見える。
妖怪研究の第一人者が贈る画期的異界論。

■角川選書

小松和彦
神隠しと日本人

神隠し……それは人を隠し、神を現わし、人間界の現実を隠し、異界を顕わすヴェール。これは人を社会的な死、即ち「生」と「死」の間に置く装置であった。だからこそ「神隠し」という語には甘く柔らかい響きがただよう…。異界研究の第一人者が「神隠し」をめぐるフォークロアを探訪し、日本人の異界コスモロジーを解明する。

■角川文庫

猫楠 neko gusu ──南方熊楠（みなかたくまぐす）の生涯──

水木しげる



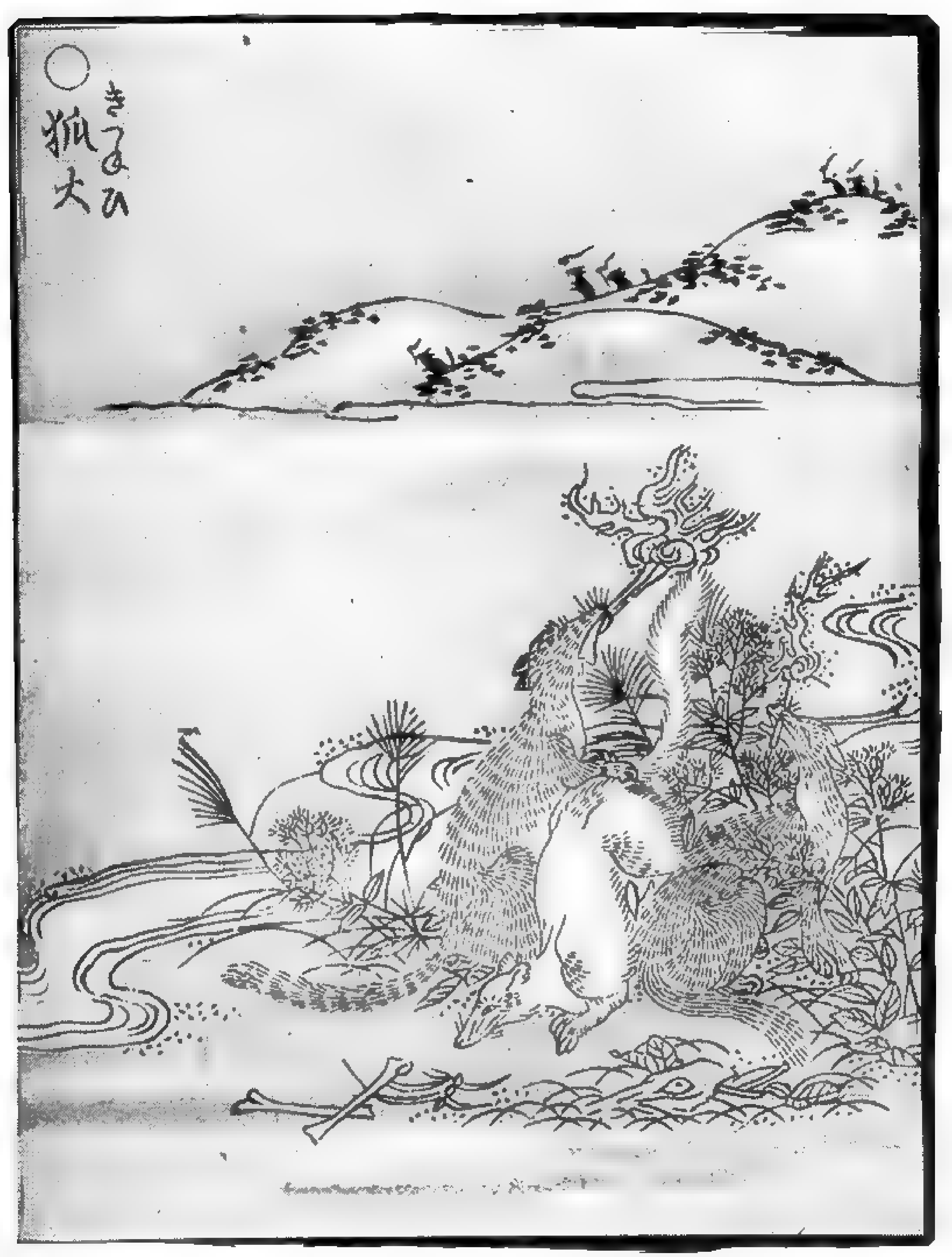
国際化とは程遠い明治中期の日本…。
単身渡英し『ネイチャー』誌に寄稿、
大英博物館嘱託員になるなど、
八面六臂の大活躍。

帰国後は民俗学、粘菌学
研究の傍ら神社合祀令反対や
熊野の森の保護運動など時代の
先をいく活動が世間を驚かせた。



そんな日本史上最も
バイタリティ溢れた大怪人の
半生を、妖怪博士水木しげるが
独特のペーソスを交えて
描く意欲作！

角川ソフィア文庫



狐火（きつねび）

怪

妖怪大戦争

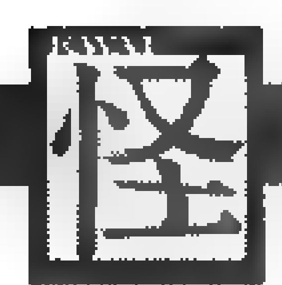
荒俣宏

「麒麟送子に選ばれし子供は、守り神の大天狗より伝説の剣を授かり、世界平和を守る正義の味方となる――」田舎に越してきたタダシは、なぜかこの大役に選ばれ、天狗の山で不思議な妖怪スネコスリと友達になる。同じ頃、日本各地で不可解な事件が勃発。化け物が人間を襲い、妖怪までもが窮地に追い込まれていた。タダシとともに悪と戦う決意をした妖怪たち。タダシは悪霊の魔手から世界を守り真の麒麟送子となれるのか？愛と平和の一大冒険ファンタジー！

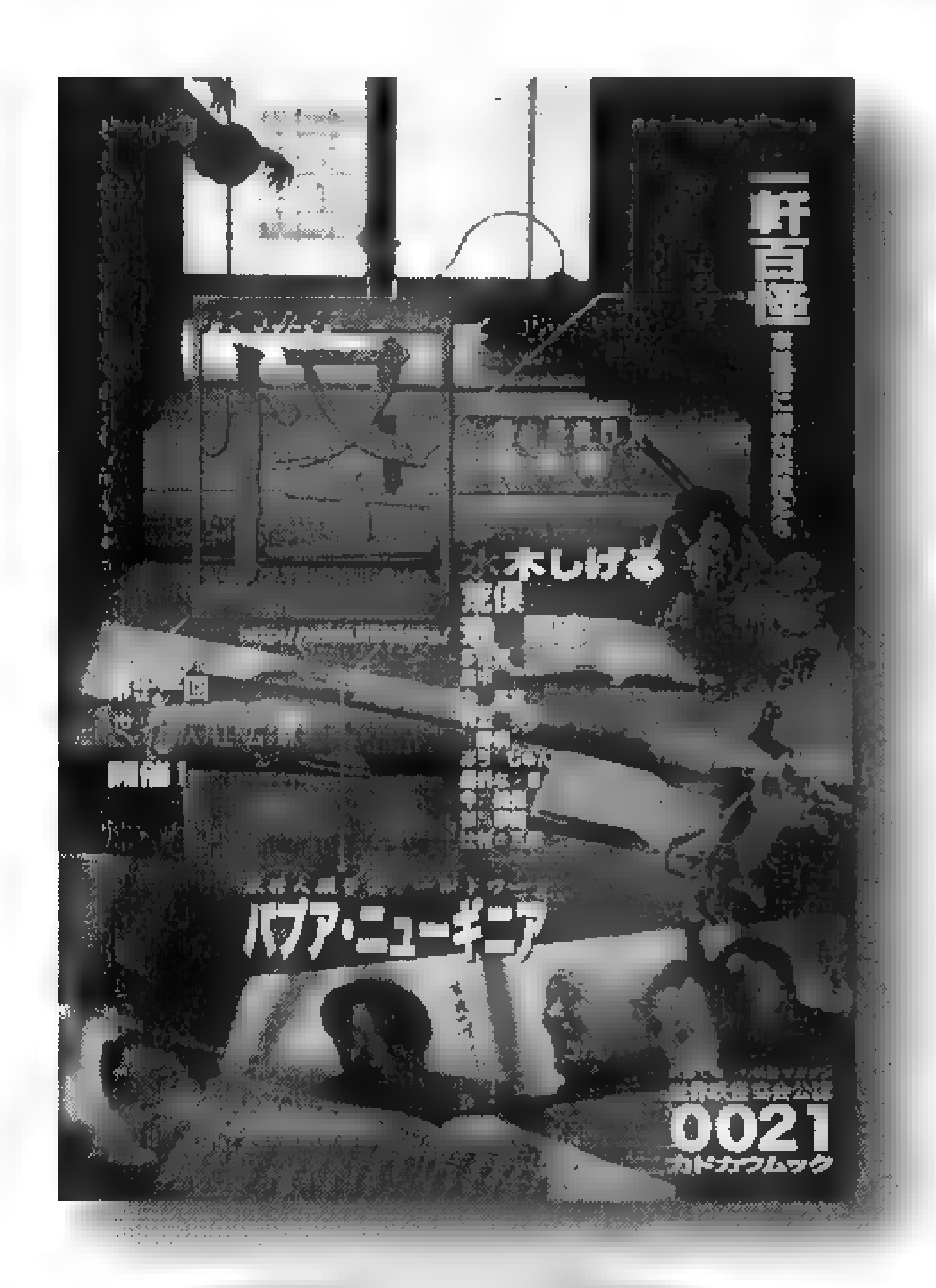


◆角川文庫

大好評
映画の
原作本



“見えない世界”を描きだす世界で唯一の妖怪マガジン



水木しげる、荒俣宏、京極夏彦ほか妖怪感度200%の豪華執筆陣による妖怪雑誌。



「怪」好評発売中！

妖怪情報満載のインターネットサイトhttp://www.kwai.org/

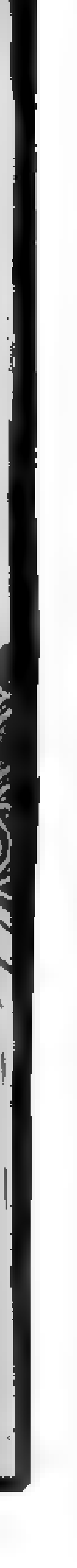


- 絡新婦（じょろうぐも）
- 鼬（てん）
- 叢原火（そうげんび）
- 釣瓶火（つるべび）
- ふらり火（び）
- 姥が火（うばがひ）
- 火車（かしゃ）
- 鳴屋（やなり）
- 姑獲鳥（うぶめ）
- 海座頭（うみざとう）
- 野寺坊（のでらぼう）
- 高女（たかじょ）
- 手の目（てのめ）
- 鉄鼠（てっそ）
- 黒塚（くろづか）
- 飛頭蛮（ろくろくび）
- 逆柱（さかばしら）
- 反枕（まくらかえし）
- 雪女（ゆきおんな）
- 生霊（いきりょう）
- 死霊（しりょう）
- 幽霊（ゆうれい）





絡新婦（じよろうぐも）



鼬（てん）

鼬（てん）



叢原火（そうげんび）

洛外西院の南、壬生寺のほとりにあり。俗これを朱雀の宗源火といふ。



釣瓶火（つるべび）



ふらり火(ぴ)



姥(うば)が火(ひ)

河内国にありといふ。



火車（かしや）



鳴屋（やなり）



姑獲鳥（うぶめ）



海座頭（うみざとう）

鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集

鳥山石燕



角川文庫 13881



野寺坊（のでらぼう）



高女

たか じょ



手の目



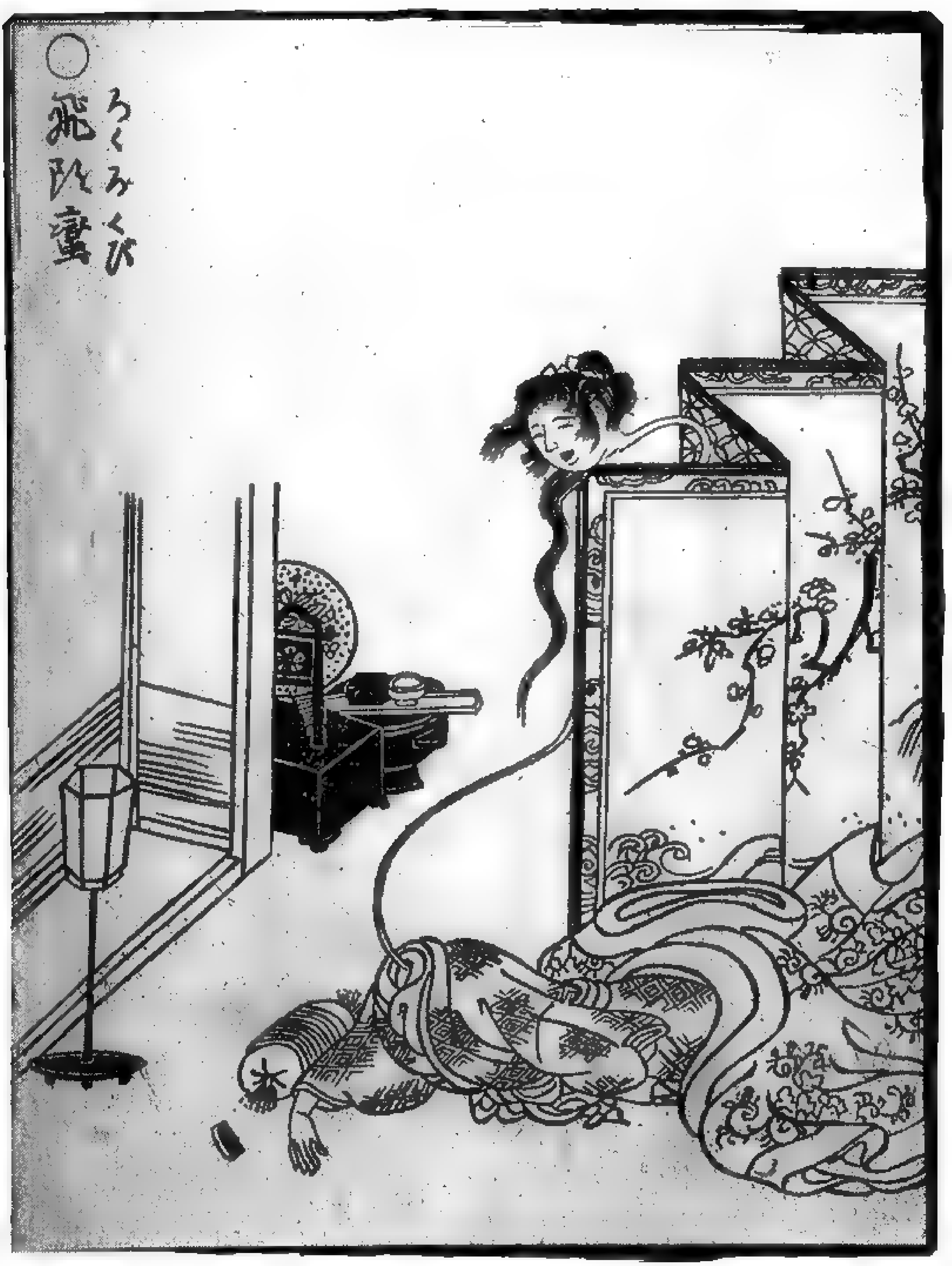
鉄鼠

頼豪の霊鼠と化と、世にしる所也。



黒塚（くろづか）

奥州安達原にありし鬼。古歌にもきこゆ。



飛頭蛮（ろくろくび）



さか　ばしら
逆柱



反枕 まくらかへし

反枕（まくらがえし）



雪女（ゆきおんな）



生霊（いきりょう）



死霊（しりよう）



幽霊（ゆうれい）



○見越（みこし）
○しょうけら
○ひょうすべ
○わいら
○おとろし
○塗仏（ぬりぼとけ）
○濡女（ぬれおんな）
○ぬらりひょん
○元興寺（がごぜ）

○苧（お）うに
○青坊主（あおぼうず）
○赤舌（あかした）
○ぬっぺっぽう
○牛鬼（うしおに）
○うわん





見越（みこし）



しょうけら



ひょうすべ



わいら



おとろし

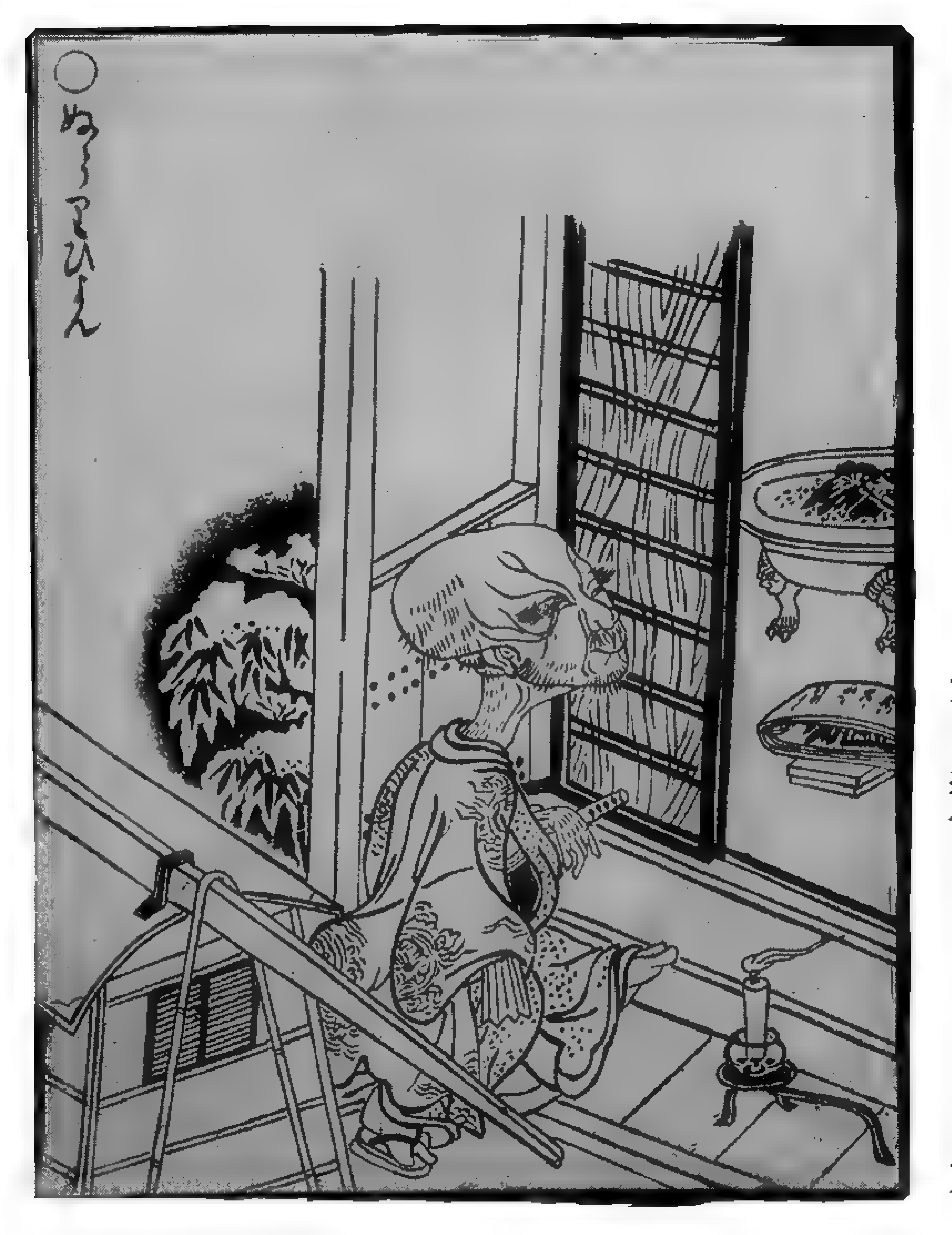


塗仏（ぬりぼとけ）

鳥山石燕　画図百鬼夜行全画集



濡女（ぬれおんな）



ぬらりひょん



元興寺（がごぜ）



苧(お)うに



青坊主（あおぼうず）



赤舌（あかした）



ぬっぺっぽう



牛鬼（うしおに）



うわん

跋文

詩は人心の物に感じて声を発するところ、画はまた無声の詩とかや。形ありて声なし。そのことぐ〳〵によりて情をおこし感を催す。さればもろこしに山海経吾朝に元信の百鬼夜行あれば、予これに学てつたなくも紙筆を汚す。ときに書林何某需るに頻なれば、いなみがたくて桜木にうつしぬ。よしそれ童蒙の弄ともならんかし。

きのとの未の秋菊月於月窓下石燕自跋

もくじ

今昔画図続百鬼

百鬼夜行題辞

曰維絵事を観に、墨画に由して丹青を生ず。是れ猶を大篆に由して而して八分を生じ、結縄よりして而して六経有るがごとし。夫れ書と画とは厥の体を同ふして、倶に文房の雅具なり。然して古の人にして古への画を画くに、厥の雅を要せずして焉に自ら雅なり。今の人にして古の画を写す、尤も其の俗なり易きを患ふるのみ。茲用世其の画を善くして伝神の妙に至る者を得難し。属都下の画人石燕なる者、画譜三巻を著す。命けて百鬼夜行と曰ふ。詮虎を介として余に告げて曰く、願くは師の題言を得て以て之を木にせんと。燕子は余未だ其の面を識らずと雖も、余と詮虎と善し。因て諾す。余時に痁作て伏すと雖も、力て目を寓することを獲たり。乃ち嘆じて曰く、美なる哉、燕子が枝（技を）為す、一に此の極に至ることや。奇なることは則ち驢を画て僧を悩す。逸ることは乃ち筆を誤りて牛を成す。況や此の譜、其の変熊（態）百体、細閲するに一々観を改む。廼ち多日の瘧熱を一洗することを覚ふ。謂つべし、手に得、心に応じて精妙に至る者なりと。余素より絵の事若しくは六法を知る者に匪ず。然りと雖ども、試に此を以て古の画譜と云ふ者に方ぶるに、筆の精しきこと孔之惟れ肖たり。是に於て知んぬ、燕子が此の芸に於ける庸庸の人に同じからざることを。世の茲の技に精しき輩ら概見して曙すべし。

時に
安永戊戌季秋の日
頑菴道人東都日莫里吉祥林の穿牛観に題す。

もゝの鬼のよる行有さま、ふるき世よりつたへて上手どものうつしたる、家〳〵にひめをけるを、人の需にてをろかなる筆にも写し侍りし。目に見えぬ鬼のかほをおどろ〳〵しく書出ぬる事は、じちにはいたらめど、人の目おどろかす斗の事も有ぬべしと、めづらかにけうときかたちどもをたはぶれのてに又かきこゝろみ侍ぬ。されどかゝる絵たび〳〵書るをめでゝ誠の鬼などのあらはれいでば、何がしが龍のたつひにいかばかりおそろしかりなんとかい撫侍るを、書の林のあるじが見いでゝ、さきのとしの一巻につがんとせちに乞侍れば、いなみがたくてこれを上るといふ事を、鳥山石燕みづから毫を月窓のもとにとる。

今昔画図続百鬼



◯逢魔時（おうまがとき）
◯鬼（おに）
◯山精（さんせい）
◯魃（ひでりがみ）
◯水虎（すいこ）
◯覚（さとり）
◯酒顚童子（しゅてんどうじ）

◯橋姫（はしひめ）
◯般若（はんにゃ）
◯寺つつき（てらつつき）
◯入内雀（にゅうないすずめ）
◯玉藻前（たまものまえ）
◯長壁（おさかべ）
◯丑時参（うしのときまいり）





逢魔時

黄昏をいふ。百魅の生ずる時なり。世俗小児を外にいだす事を禁む。一説に王莽時とかけり。これは王莽前漢の代を簒ひしかど、程なく後漢の代となりし故、昼夜のさかひを両漢の間に比してかくいふならん。

逢魔時
黄昏をいふ百魅
の生ずる時なり
世俗小児を外
にいださず一説
に王莽時とかけり
これハ王莽前漢の代を
簒ひしかど程なく後漢
の代となりし故昼夜
のさかひを両漢の間に
比してかくいふならん



鬼

世に丑寅の方を鬼門といふ。今鬼の形を画くには、頭に牛角をいたゞき腰に虎皮をまとふ。是丑と寅との二つを合せて、この形をなせりといへり。



山精（さんせい）

もろこし安国県に山鬼あり。人の如くにして一足なり。伐木人のもてる塩をぬすみ、石蟹を炙りくらふと、永嘉記に見えたり。



魃（ひでりがみ）

一名を旱母（かんぼ）といふ。もろこし剛山（がうざん）にすめり。その状（かたち）、人面（ひとのおもて）にして獣身（けもののみ）なり。手一つ足（あし）一つにして走（はし）る事、風（かぜ）の如し。凡此神出る時は旱（ひでり）して雨ふる事なし。



水虎

水虎はかたち小児のごとし。甲は鯪鯉のごとく、膝頭虎の爪に似たり。もろこし涑水の辺にすみて、つねに沙の上に甲を曝すといへり。



覚

飛弾美濃の深山に玃あり。山人呼で覚と名づく。色黒く毛長くして、よく人の言をなし、よく人の意を察す。あへて人の害をなさず。人これを殺さんとすれば、先その意をさとりてにげ去と云。



酒顚童子

大江山いく野の道に行かふ人の財宝を掠とりて、積たくはふる事山のごとし。輟耕録にいはゆる鬼贓の類なり。むくつけき鬼の肘を枕とし、みめよき女にしやくとらせ、自ら大 盃をかたぶけて楽めり。されどわらは髪に緋の袴きたるこそやさしき鬼の心なれ。末世に及んで白衣の化物 出と聖教にも侍るをや。



橋姫

橋姫の社は山城の国宇治橋にあり。橋姫はかほかたちいたりて醜し。故に配偶なし。ひとりやもめなる事をうらみ、人の縁辺を妬給ふと云。



般若

般若は経の名にして苦海をわたる慈航とす。しかるにねためる女の鬼となりしを般若面といふ事は、葵の上の謡に、六条のみやす所の怨霊行者の経を読誦するをきゝて、あらおそろしのはんにや声やといへるより転じて、かくは称せしにや。



寺つつき

物部大連守屋は仏法をこのまず、厩戸皇子のためにほろぼさる。その霊一つの鳥となりて、堂塔伽藍を毀たんとす。これを名づけて、てらつゝきといふとかや。



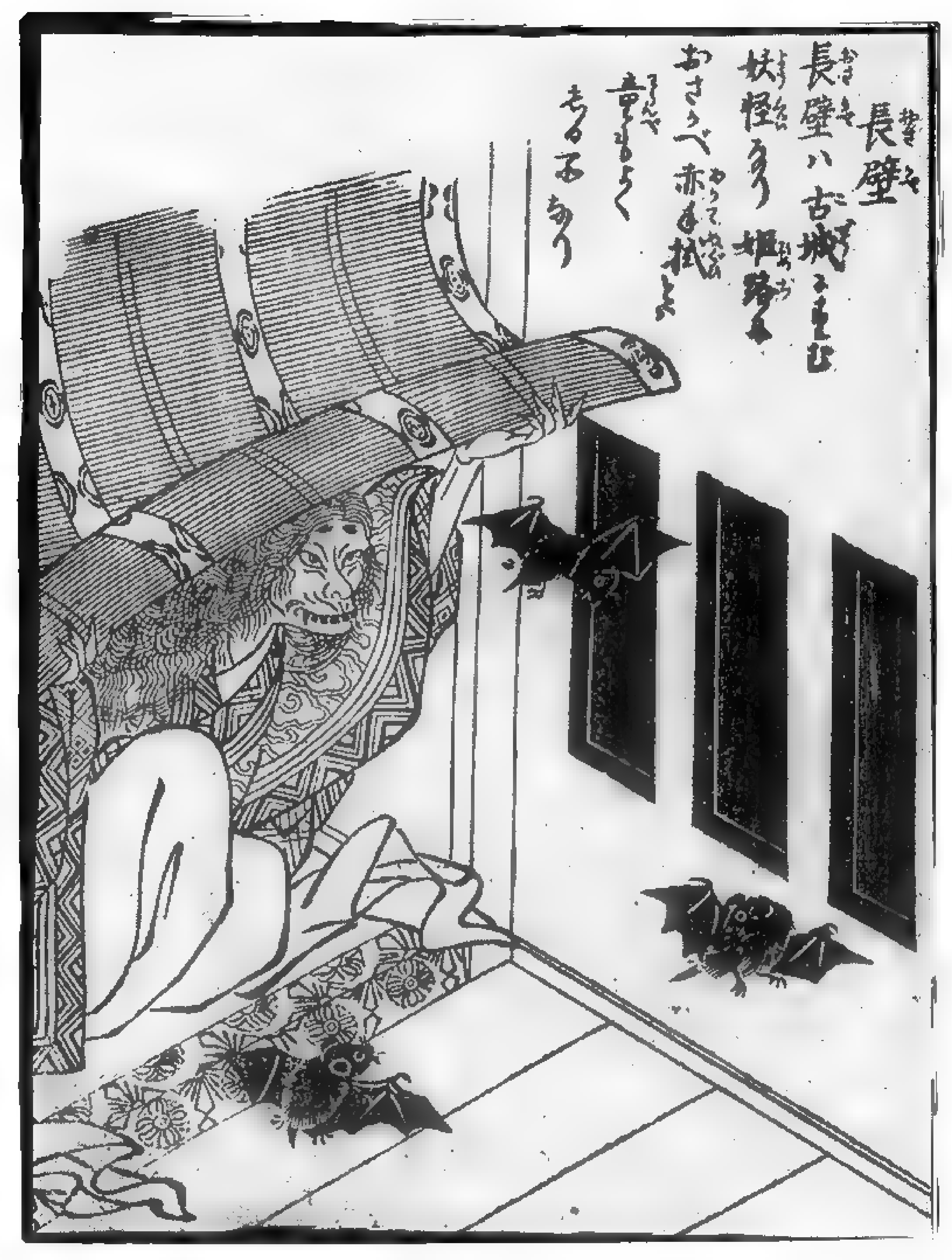
入内雀

藤原実方奥州に左遷せらる。その一念雀と化して大内に入り、台盤所の飯を啄しとかや。是を入内雀と云。



玉藻前

瑯邪代酔に古今事物考を引て云、商の妲巳(己)は狐の精なりと云々。その精本朝にわたりて玉藻前となり、帝王のおそばをけがせしとなん。すべて淫声美色の人を惑す事、狐狸よりもはなはだし。



長壁（おさかべ）

長壁は古城にすむ妖怪なり。姫路におさかべ赤手拭とは童もよくしる所なり。



丑時参

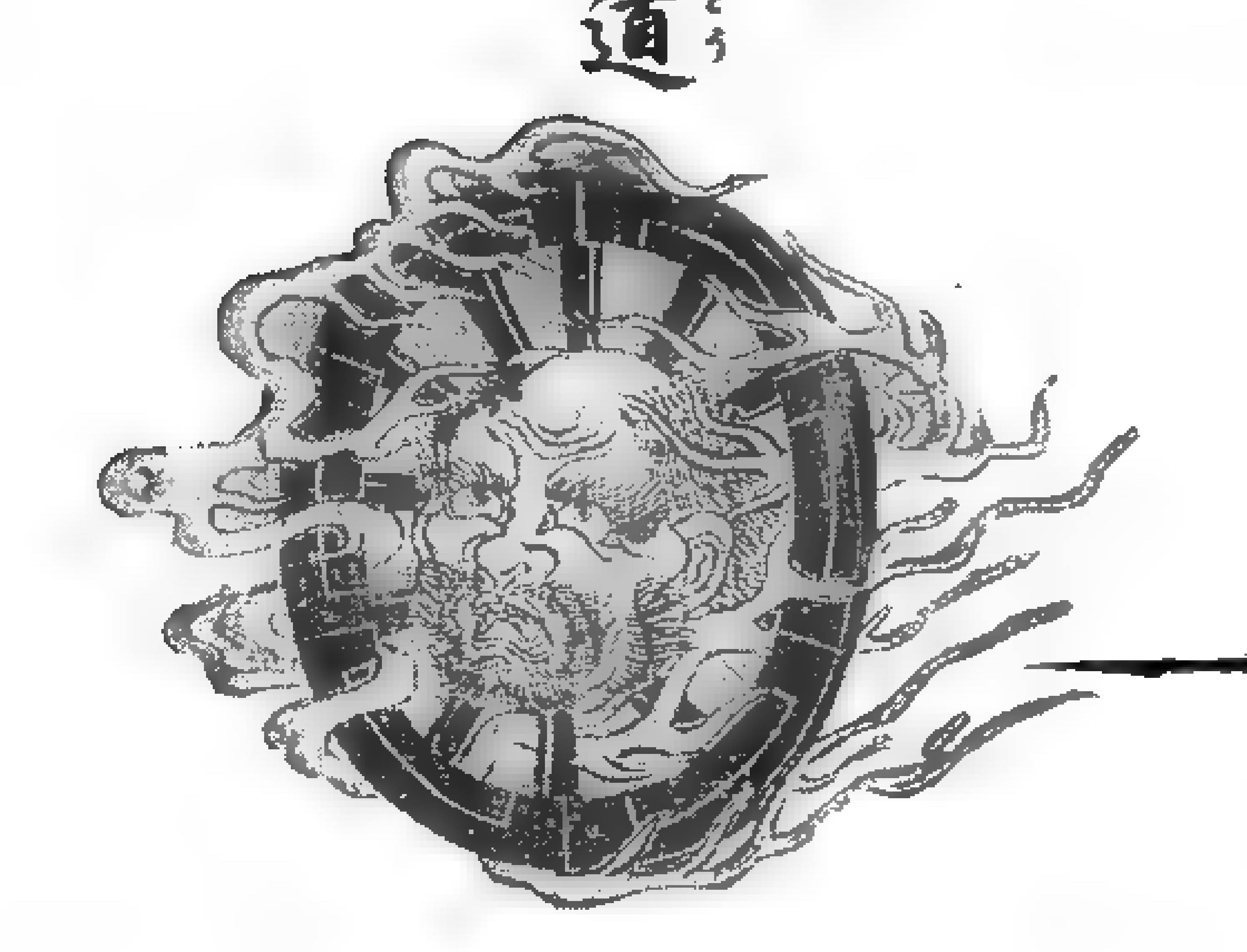
丑時まいりは胸に一つの鏡をかくし、頭に三つの燭を点じ、丑みつの比神社にまうでゝ杉の梢に釘うつとかや。はかなき女の嫉妬より起りて人を失ひ身をうしなふ。人を呪咀ば穴二つほれとはよき近き譬ならん。

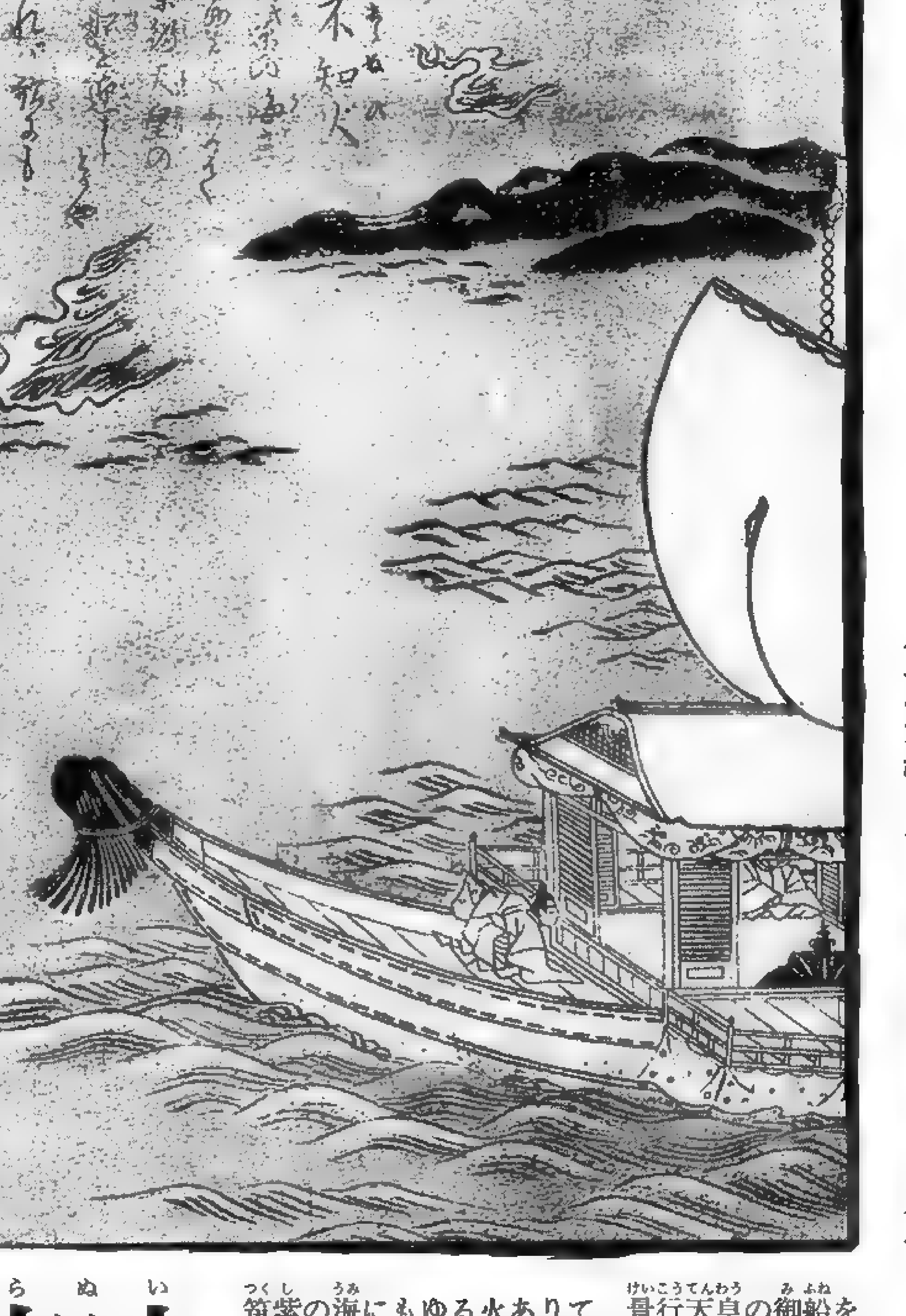


○不知火（しらぬい）
○古戦場火（こせんじょうのひ）
○青鷺火（あおさぎのひ）
○提灯火（ちょうちんび）
○墓の火（はかのひ）
○火消婆（ひけしばば）
○油赤子（あぶらあかご）
○片輪車（かたわぐるま）
○輪入道（わにゅうどう）

○陰摩羅鬼（おんもらき）
○皿かぞえ（さら）
○人魂（ひとだま）
○舟幽霊（ふなゆうれい）
○川赤子（かわあかご）
○古山茶の霊（ふるつばきのれい）
○加牟波理入道（がんばりにゅうどう）
○雨降小僧（あめふりこぞう）
○日和坊（ひよりぼう）

○青女房（あおにょうぼう）
○毛倡妓（けじょうろう）
○骨女（ほねおんな）





不知火(しらぬい)

筑紫(つくし)の海(うみ)にもゆる火ありて、景行天皇(けいこうてんわう)の御船(みふね)を迎(むかへ)しとかや。されば歌(うた)にもしらぬひのつくしとつゞけたり。



古戦場火

一将功なりて万骨かれし枯野には、燐火とて火のもゆる事あり。是は血のこぼれたる跡よりもえ出る火なりといへり。



青鷺火（あおさぎのひ）

青鷺の年を経しは、夜飛ときはかならず其羽ひかるもの也。目の光に映じ嘴とがりてすさまじきと也。

提灯火

田舎などに提灯火とて畔道に火のもゆる事あり。名にしおふ夜の殿の下部のもてる提灯にや。



墓の火

去るものは日々にうとく、生ずるものは日々にしたし。古きつかは犂れて田となり、しるしの松は薪となりても、五輪のかたちありありと陰火のもゆる事あるはいかなる執着の心ならんかし。



火消婆

それ火は陽気なり。妖は陰気なり。うば玉の夜のくらきには、陰気の陽気にかつ時なれば、火消ばゞもあるべきにや。



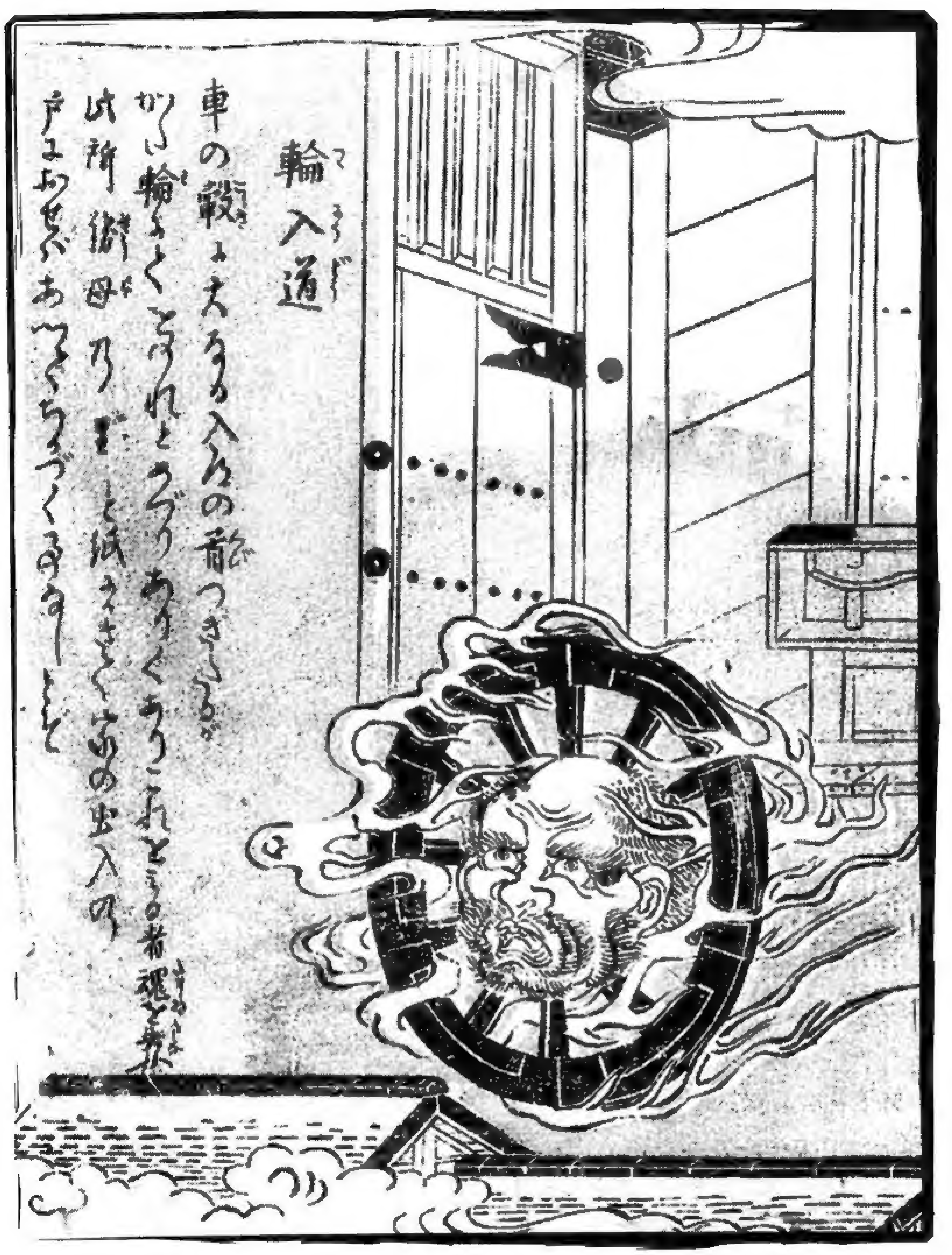
油赤子

近江国大津の八町に玉のごとくの火飛行する事あり。土人云、むかし志賀の里に油をうるものあり、夜毎に大津辻の地蔵の油をぬすみけるが、その者死て魂魄炎となりて今に迷ひの火となれるとぞ。しからば油をなむる赤子は此ものゝ再生せしにや。



片輪車

むかし近江国甲賀郡によなよな大路を車のきしる音しけり。ある人戸のすき間よりさしのぞき見るうちに、ねやにありし小児いづかたへゆきしか見えず。せんかたなくてかくなん、〽つみとがはわれにこそあれ小車のやるかたわかぬ子をばかくしそ。その夜女のこゑにて、やさしの人かな、さらば子をかへすなりとてなげ入レける。そのゝちは人おそれてあへてみざりしとかや。



輪入道

車の轂に大なる入道の首つきたるが、かた輪にてをのれとめぐりありくあり。これをみる者魂を失ふ。此所勝母の里と紙にかきて家の出入の戸におせば、あへてちかづく事なしとぞ。